



尹 シ ン 物 語 the Story of Ishen

by

Siveeyeah

Lyeowcau

基本公理

キャラバッシュパイプを燻らし、瞑想に耽る。暖炉で薪がパチパチはぜながら燃えている。

わたしはマウス mouse であってラット rat ではない。これは重要だ。だがさよう主張するからと言って民族(種属)絶対主義ではない。なぜなら哲学者であるからである。

睿智は必然的に存在者を超越的客観へと導く。超越的客観認識を持つとうとしない存在者は反進化的であり、永久普遍の時代意志に反している。

すべての進化は様々に分岐する迂回路を有しながらも総体的には超越を欣求する。時代的要請だ。では超越的認識とは何か。即説咒曰、

『世界はシミュレーテッドリアリティ (Simulated reality) にして、
現実^{リアリティ}は **零**^{シム}にて候』

つまり、林檎がある(存在する)、とは、林檎の所持や摂取を前提としている。関心がなければ存在ではない。所有欲や食欲がなければ林檎は存在ではないのである。

存在は結果を導くための方便であり、造られたもの(捏造)であり、それ自体の意義・根拠などない。

それなのに『なぜ非存在ではなく、存在なのか』とは。ライブニッツよ。

元々さような問いは焦点がズレている。

一切の認知は便宜の捏造。自己を超越した者に見える事実は、数十億年かけた生命の歴史が構築する生存の絡繰りによって造られるものではない。

我々の想像を絶する。

第一部

第一章 暗黒時代

第一節 序奏曲 “前置”

かく言う彼の名はイシユマエル。

出掛けるときはベレー帽を深くかぶり、ツイードの上着、タータンチェックの毛織りのベストを着用する。入念に顔を剃り、パフュームをつけ、チックでヒゲを固めるのである。

出掛ける前の水分補給に茶などを嗜む。

パイプや葉巻とともに香りを楽しむのはコーヒーもかりだ。

イタリアの『ジャマイカカフェ Jamaica Caffè』を愛飲する。香りを愉しみつつ、ゆっくり吸るのだ。

そんなときのカップ＆ソーサーは秘蔵のウェッジウッド。

クラシカルなパウダークリーンやパウダーピンクの潇洒なデザインのものである。これもまたイシユマエルの趣味にほどよく合う。

むろん人間たちが言う意味で、事実そのようなことをしているというのではない。

とは言え、比喻でもない。多くの人が比喻であろうと勘違いするのが眼に見えているので敢えてそう言っておこう。

まったくもってそうではない、と。

人間の眼にはただマウスケージの中を忙しく動いたり回し車でいっしょうけんめい無意味に走っていたり水を飲んだり鼻をヒクヒクさせたりしているだけの存在に見えるかもしれないが、それは解釈の相違で、彼らの解釈の中で我々は、ゆったりとアームズチェアに坐り、暖炉の前で足先を暖め、パイプをくゆらせながら皮革装丁の古い上製本を読んでいるのだ。あるいは神聖で、哲学的な議論を重ねているのである。

逆に彼らから見れば、ウォール街のニューヨーク証券取引所で、い

っしょうけんめい指を立てたり声を上げたりする姿やニューヨーク連邦準備銀行の会議室で議論をしている姿などは、空転する回し車同様の動作にしか見えないのである。

哲学者イシュマエル曰く、

「人間は逆から物を見ることができない。人類とは自分こそが正しくて、どう考えても間違っているのは相手の方だとは思うことのできない生物だ。

つまり自分は利口で相手は愚かだと思って自惚れているのである。

わたしに言わせれば知能の差など僅少でしかない。何と言ったって同じ構造なのである。同じ程度でないなら非論理的ではないか！ 実にくだらない。思考回路の古い者ほどその度合いが強い。

即ち客観的思考や相対的思考というのは進化の基準なのである。

人間は自分たちを絶対基準として物事を考える下等で古いタイプの、器量の狭い生き物だ。しかしそれが彼らの今日の成功につながっている部分があることも否めない。もし自然の大いなる意志とつながっていたならばああいふふうにはならなかっただろう。即ち自然と調和してけて爆発的に繁栄しなかったであろう。これは人類が比較的近い未来に滅亡することを意味する。

悔い改めない限りは。

まあ、いずれにせよ、それらの点を除けば我々も人間とだいたい同じだ。……いや。

そうではない。もう一つ相違がある。結局それは同じことなのだが、人間には解釈学に通暁している者が（他の種属に比して）少ない。つまりは先程も指摘したように人間は自分を超越できない生き物なのである。

わたしは人間を理解している。しかし人間はそうではない。これだけでも充分な証左だ。

人間の眼にはマウスが知的であることが見えていない。いや、マウスを知的と言う人もいる。しかしその人が言うのはあくまで人間の考える意味での知性、人間の解釈による知性だ。

我々の知性はそれには当てはまらない。我々に限らず、猫の知性も薔薇の知性も大理石の知性も二酸化窒素の知性もそれには当てはまらない。

だから人間には彼らに知性や感情があるように見えないのだ。人間の認識は根底から誤っている。わたしにはその理由がわかっている。人間は自分の経験を超えて物事を理解できない。そのせいで他者が理解できないのである。人間が経験を超えて物事を理解できない理由は明快だ。彼らは個別の意識しか持っていないからだ。自らに執著するあまり、個別の意識しか持ち得ないのである。それが自らの経験を越えられない理由だ。

人間以外の存在者はまったく違う。

我々は真に知的で、高度な文明を持ち、文化的で洗練された、豊かな生活を送っている。しかし人間はほとんど全員が個人中心、人間中心主義的で、マウスの生活をさもしいものと思っている。

さもしいのは人間である。

解釈の相違に過ぎないという客観的視点を持っていないからだ。つまり自分以外の存在者の立場になって物を考えることができないということだ。

立場の置き換えができるということこそ知性であり、神の与えたもうた理性である。客観的精神の度合いがすなわちその存在者の精神の高度を表明しているとわたしは断言してはばからない。

およそ知性というものはどれほど客観的視点を持っているかによって決まる。これは基本公理に述べたとおりだ。それはどれほど自己超越出来ているかと言い換えてもいい。

人間世界においても優れた人間はみんな自己超越しているではないか。

イエス・キリストしかり。釈迦しかり。そういった実例を見ながら解釈学を理解できない人間の愚かさは凄まじいものだ。その愚かさこそが客観性をもって事象を対象化しながら、私有による優越性の確認にしか使えない人間の、おお、何という愚かさであろうか！

奇跡とも言えよう。どうしたらそんなに愚かになれるのか教えて欲しいほどだ。同じ人間なのに、国や文化や習慣や宗教や考え方が違う人間の行為を理解しない人間は愚劣である」

いやはや、前置きが長くなってしまった。物語を始めよう。

第二節 キャラクター

イシュマエルは仲間内ではイシュと呼ばれている。

彼らはいしたみがあめたらう贅淋太良のペットたちであった。

彼は非常に穏やかな、いや、暢気な、世間を超越した人物で、小学生の頃から箱庭や盆景や盆栽が好きで、薄暗い和室が好きで、雨の散歩が好きな人物であった。

イシュはその日も憂鬱であった。銀のカーテンのように間断なく降り頻る雨は地に落ちて激しく弾けている。

「ご主人の趣味については我々ペット一同、まことに辟易しているのだ。

特に今朝のような真冬の土砂降りは勘弁してほしい。

要するに我がご主人は空想を掻き立てるようなものに強く惹かれるのだ。

雨や雪の日を好み、まるで動く要塞のように重装備して出かける。

その装備がどれほど雨を防ぐかを見るのが好きなのである。そしてまた様々な装備をしても、箇所によって風の吹き込む寒さや濡れ具合などに差ができる。その差を見るのがまた好きなのだ。そのためたくさんさんの一族郎党を連れ歩きたいのである。

まずは大きなビーチパラソルだ。傘では足りないからだ。遠目にはまさしく家である。パラソルの下（というか土台）には双子用のフーデド附ベビーカートだ。その中を四つに仕切って、まず四種類の生き物たちがいる」

イシュは説明を続けた。

「最初に紹介したいのは、ドワーフハムスター（の中のシベリアンハ

ムスター)のシベルだ。彼はわたしの相棒なのである。ジーンズにロングブーツで、皮革製のボレロを着用し、鰐の広い帽子をかぶっている。ブーツとボレロにはレザーカービング (leather Carving) が施されている。これは革に施す彫刻技術で、スペインで発祥し、アメリカに渡ってカウボーイなどが装身具や馬具に施してよく知られるようになったものだ。

『やあ、イシュ。

ぶるるっ。今日も冷えるな。

まったくもってひどいね。屋根があっても雨が吹き込むよ。バチバチと激しい強い雨じゃないか。

まあ、この暖かい防水ブランケットがあるから、俺たちはまだいいけどな』

むろん彼らハムスターの解釈と我々マウスの解釈は異なる。しかし解釈のプロトコルをわたしが持っているので、意思の疎通が可能なのだ。プロトコルとは共通理解をするための約束事だ。つまりわたしは彼らの解釈の規則を体内に持っているのである。

翻訳機能を内蔵しているようなものだ。

これはむろん、天才たるわたしが解釈学に特別に通暁しているからできるのである。

さて、その隣の部屋にるのが、テッセルという縮れ毛長毛種のモルモット。彼の名はノースだ。

ロココ時代の貴族のようなサテンの膝丈上着にレースのついた大きなカフス、襟元には大きなフリルがついている。腰には握り柄の凝ったサーベルだ。

『見てくれ、この帽子。

新調したんだ。素敵な羽飾りを見てくれよ。

え？ いや、気にしないね。なあに、雨に濡れるとわかっていてもね、かぶって来たのさ。

これが洒落者の心意気だよ』

そう言って長い縮れ毛をかき上げてみせる。

あとの二つのボックスには、先々週出産したばかりの三毛猫アメリカとその娘ミニニ、そして生後一ヶ月のミニチュアダックスフンドのジュールだ。いずれも柔らかなブランケットにくるまって寒さを凌いでいる。

しかしやはり震えているではないか。

さてその四つに仕切られた部屋の上には、ロフトのような中階がある。そこには小フード附のボックスが置かれ、ひよこの兄弟が藁にくるまっていた。

藁は暖かいだろうが、同様に震えている。

彼らはアルス、ポトス、アミスという。ご主人は三銃士を意識したのであろう。このひよこらに。

まったく理解不能だが」

彼の諦めたような困惑のような顰め面を見て私は笑った。彼の表情を理解するには彼らのプロトコルを身につければいいのである。

イシュはパイプに香り高い煙草をつめた。そして話を続ける。

「で、これら五ヶ所が最も居心地の良い場所と言える。

ビーチパラソルはこのベビーカートに取りつけられていて、ベビーカートを手で押しているご主人本人もその傘下に、すっぽり入っている。パラソルの骨のところ小さな巣が作りつけられ（折りたたむときは外されるのだが）、ムササビのベンダムがいる。彼はタフな傭兵であり、忍者のように身軽で、影のように闇にまぎれて音もなく忍び寄り、声上げる暇も与えず敵を倒すことができる特殊部隊のごとき戦士だ。

さて、動く四阿あずまやとも言えるこの艦は老セントバーナードのロニーの手綱にもつながっていて、この犬も一応、パラソルの下には入っている。見る角度によっては、犬がベビーカートを牽いているようにも見えるのだが、むしろ、その見かけは事実ではない。もしも事実ならば地域の動物愛護家たちから激しい抗議を受けたであろう。しかし見た感じがそうなのは否めない。

よってこの戦艦（バトルシップ）の名称はシリウス（Sirius）とこう

わけだ。犬星、青星（あおぼし）、Dog Star, 天狼星だ。

むろん、バトルシップ・シリウスの乗組員はこれだけじゃない。

後ろについている買い物バッグから、豆柴犬がちょこんと顔を出してご主人を見上げている。彼が十兵衛だ。彼は実際、サムライなのである。

十兵衛と一緒に袋にいる子猫はロシアンブルーのロシア嬢である。

まるで先祖はロマノフ王朝でアナスタシアの膝に抱かれていましたと言わんばかりの顔つきだが、出自不詳の捨て猫であった。

その隣にはロップイヤーという耳の垂れたうさぎで、メガネをかけた学者のロゴスだ。たぶん、不思議の国のアリスを意識してだろうが、時折、懐中時計を出しては覗いている。

カートの左右のバッグにはモモンガのマカロニと、シマリスのリリ。マカロニは昼間ほとんどバッグから顔を出さないし、リリも乾燥させたヒマワリの種をかじりながら、情けない顔をしていた。

パラソルには二つの鳥籠が吊るされており、インコのセインと十姉妹のハヤテが巣箱で寒そうに震えている。鳥籠にはカーテンのようにクリムゾンのベルベットがかけられているのだが、そこまで気を遣うくらいなら連れて来なければいいものと思う。

しかし、このご主人、一族郎党で出掛けるのが楽しくてしかたないらしい。

本当に困ったものだ……

そして驚くべきことに左右のハンドルに板で橋を渡し、そこにビニールに包んだサボテンのラマーの鉢を乗せている。

しかもその渡し板には透明プラスチックの携帯用飼育ケースが二つぶら下がっていて、水の入った方にはイモリの翔太、そうでない方にはヤモリのサブラウがいる」

「そういうあなたはどこが指定席なのですか？」

「ああ、そうだった。

さてさてかく言うわたしがどこにいるかと言えば御主人のコートのゆったりした右胸ポケットにすっぽりとはまり、悠々高みの見物をし

ている。

しかし寒さはなかなかのものだ。何しろ顔面には風がまともに当たる。ご主人の体温を遠く感じて暖かいとも言えるが、しかし狭くてゆっくり出来ない。

そういう点では、コートの腰のあたりの右ポケットにいるイシガメの吉郎などはまだ広々くつろいでいられる。そのせいか鬱々たる日ものんびり雨を眺めている。

同じく腰あたりの左ポケットにいるトカゲのジョニーがわたしに向かっていった。

『おい、おい、イシュ。』

ちよつとアイが大変そうだぜ。ちよつと見てやつてくれよ。

おまえの力で何とかしてやつてくれ』

言われるまでもなく気づいていた。左胸ポケットにいるスマートフォンのアイがひどく青ざめている。機械類の彼女が我々と同じ解釈で寒さに閉口しているわけではあるまい。

寒さと言えば先頭に行く老犬ポールはぐつしよりでさぞかし寒いだろう。

『おい、アイ。君が苦しんでいるのは雨だろう？』

わたしは声をかけた。

『むろんそうよ、ああ、たまんないわ』

アイが言った。

先も言ったとおりわたしは解釈学に通暁していたので、あらゆる存在の解釈世界を翻訳することができた。

わたしにはスマホの世界解釈すら解釈可能なのだ。

『あたしみたいな精密な電化製品には最悪よ』

『心から同情するよ、アイ。』

そうだ、ご主人がそのポケットの蓋を君の頭にかぶせるように努力してみよう』

わたしはご主人のインパルスの波動をつかむように集中した。つかむと彼に話しかけた。そして緩やかに不安物質が分泌されるように依

頼した。

ご主人がわたしを見下ろす。

眼が合った瞬間、わたしは鼻先をアイの方へ向けた。ご主人は無意識的に手を動かし、ポケットの蓋をアイにかぶせた。

『ありがとう』

アイが蓋の下からかな声でお礼を言った。

わたしは慇懃に

『いえいえ、どういたしまして』

と言い、レデイに対する礼儀として深々と辞儀をした。

以来、わたしはアイと親しくなる機会を得たわけだ。

これは重要なことであつた。どれほど天の神に礼を言っても言い足りない。

彼女との意思の疏通がサイバー世界への入口になった。わたしはサイバー空間での存在を理解し、脳のニューロンが意識せずとも精緻複雑精妙な仕事をするように、わたしの思考は信号としてサイバー世界に生きて意思を存在させ、人間がインターフェイスを通じて参加するように参加することができるようになった。

わたしはサイバー世界の要となる、サイバー存在の真髄の叡智を会得したのである」

第三節 ワールド

「かくして結果として、わたしはデジタル信号の声（存在表明、すなわち現象）を“聴く”方法をつかむことができるようになったのだ。デジタル信号の内部存在、サイバー世界を観じたのである。

まったくもってアイや超薄型携帯用ノートブックPCのギゼク（GZK）のおかげだ。

どうやってか。

答は簡単だ。

すなわちわたしはアイやギゼクと心を通わすうちに、電腦世界にあ

る内部存在に気がついたのである。それ自体は物理的には電気ではない信号が作り出す内部世界（サイバー世界）を世界解釈して観じられるようになったのだ。

解釈学の最大の成果だ。

そして人間の解釈世界に通曉していることが役に立った。何しろ、ネットの世界は人間の価値観による解釈だけで出来上がった世界なのだから」

人間は様々なインターフェイスを通じてサイバー空間を観たり聴いたりして体験するが、イシュはそのように間接的な方法を取ることなく、直接体験できるようになったのだ。

彼は人間のようにネットの世界を楽しんだ。

特に興味を深くしたのは、ご多分に漏れず、あのRPGの頂点、リアル・ワールド Real WorldTMだ。

それはゲームと言うより、ほとんど現実の冒険であった。

なぜならばシミュレーテッド・リアリティ体験システムによってネット上に創られた仮想現実の中に入り、その中で、実際にそこにおいて、そこで生きているかのように、その世界の中で生活し、海や森や山脈を冒険し、戦い、旅するゲームからだ。

その最大の特徴は自分の好きなアバター（キャラクター）を創り、そのアバターになって生きることができるということだ。

アバターが感じたことをそのまま感じ、自分が言いたいことをアバターを介して相手に言い、意思した行動をアバターがその世界の中で行動する。

インタラクティブ（対話式・双方向的）・システムによってRWの情報データを受けてその世界を体験し、なおかつ受身だけではなく、自分の脳波を伝えて、アバターをその世界の中でしゃべらせ、行動させるのだ。

自分の好みのキャラになって冒険。これほど楽しいことも他にないだろう。

こうして現われた世界はまさしく現実であった。考えてみればシミ

ユレーテッドリアリティは解釈学の原理に基づいていて、つまり普段の脳内の活動と同じであり、存在とは解釈によってできた表象なのだからRWが現実なのは当然だ。

イシユは語った。

「わたしは侵入し、わたしと同じ姿のアバターをそのサイバー世界に現象させ、存在させた。人間の姿を創ることも考えたが、わたしにはわたしの矜持があった。

敢えてマウスの姿をサイバー空間に構築した。

むろん、わたしの行為は不正アクセスである。

しかしさすがに運営側もこういうハッキングは想定していなかっただろう。

セキュリティに引かかることもなく、またスキヤニングの監視に遭うこともなかった。

正規なアクセスではないので、一切の制限を受けることがない。他のユーザーに比べれば圧倒的に自由な、特別な立場で活動することができるキャラとして、わたしはサイバー世界に実在していた。

そんなある日、ふとわたしはRWへ正規に正面からアクセスしてみようと思い立った。そしてRPGのエントランスとも言うべきまず入ろうとして成功する。

わたしは市壁に囲まれた街の前にいた。

市門があり、わたしはそこから入った。

装甲武装した物々しい門衛はいたが、何も言わない。

見たこともない蒼穹と古い石畳の街並み。様々なアバターが大通りを往来している。

いつもどおりだが、わたしはあることに気がついた。

『おや、あれは』

中空に半透明なメニューのようなものがならんでいるのだ。

周りのアバターに訊きたかったが、知らないと不正アクセスがバレるかもしれないと思い、やめた。メモを取り、後でインターネットで調べようと思った。

むろん物凄くたくさんあるので、いくつかメモするにとどまった。さて現実世界に戻って早速、思念を集中し、調べ始めた。そしてわかった。あのメニューはすべてワールドの名称だったのだ。

すなわちリアル・ワールドはその中にさらにいくつものワールドを持っているのである。

それらはユーザーが創ったワールドだ。

ちようど、2チャンネルにスレッドを立てるような感覚で、自分の好みのワールドを、リアル・ワールドのシステムを使って、リアル・ワールドの内部にユーザーのオリジナルのワールドを創ることができるのだ。

多少知識が必要なので、スレを立てるほどに簡単ではないが。

わたしは様々な興味深いワールドの存在を知った。そのうち特に興味を持ったワールドはIEという名のワールドであった。

わたしはバトルや疑似恋愛などに興味はない。

IEすなわち *Isēa Earth* イデア・アースは善行を積みめば、クドク(QDQ)ポイントがついてレベルが上がり、偉大になれるというシステムであった。

ゆえにわたしは非常に興味を持ったのである。

さっそく闇雲に不正アクセスし、侵入した。

するとどうだろう。わたしは真っ暗な(あるいは夜だったのかもしれない)中にいる。

そこでは、氷の礫のような恐ろしい吹雪が凄まじく吹き荒れ、寒くて殺伐としていた。

わたしはこのような荒涼たる世界に投げ込まれていた。

眼を瞑ったみたいに、何も見えない。黒しかない。

音がすごい。ビュービュー耳を劈く。風が強くて立ってられない。

風に飛ばされて氷の弾丸のようなものが絶え間なく頬にあたる。耳を打つ。すごく痛い。

しかも寒さは凄まじいものであった。

怖い。怖過ぎる。ユーザーはみんなこれに耐えているのか？

信じられない。やはり不正アクセスだから、こんなにすごいことになってしまったのか。わたしはすぐに引き返そうと思った。

しかしである。

足下が積もった雪のようであることは踏んだ感触でなんとなくわかった。

息もどうにかできる。もう少し様子を見よう。

わたしは数歩、歩いた。

『あっ！』

自分が転落するのがわかる。

上下も左右も何がなんだかわからず、転がる。岩に何度も体があったって痛い。どこかで止まってくれるかと思いきや、ちっとも止まる様子はない。『これはまずい』

わたしの知能を超えた本能が、ああ、なぜ本能は予知夢のように、見たことも聞いたこともないことを知っているのだろう、わたしの尾っぽは咄嗟に伸びて、岩にグルグル巻きつき、わたしの転落を止め、わたしの命を救った。

わたしは断崖絶壁と推定される場所で（恐らく）宙吊りになっているようであった。

見上げてまっ黒な平面しか眼に映らないし、下を見ても何もわからない。ただ異様な深淵のオーラがあり、物凄い深い谷間か、亀裂であるかのように、本能的に直感できた。

わたしは心が落ち着くのを待ってから、手探りで吹雪く岩壁を這い上がった。こういうのは人間よりは遥かに得意である。

ようやく上と思われる位置にたどり着いたとき、わたしは危険を察知した。臭気だ。

肉食獣と思われる生臭い獣臭！ あっ！

『ぐわおおおっ』

吠え声がしてわたしは反射的に身を逸らした。これも本能だ。意思は関係ない。まったくもってわたしなんぞ要らないのである。本能さえあれば事足りる。

我が身に激痛が走っていた。

どこかを爪で裂かれたに違いない。アドレナリンが噴出する。

爛々と闇に燃え爛れる眼を感じた。猛吹雪で音もかき消され、氷礫に皮膚を切られても、闇の奥に潜む爪や牙の存在 Existence を感じた。

虎だ。わたしは何の根拠もなく、見えるかのようにそう直感した。

やばい、今度こそやばい！

走って逃げ果せるわけがない。

わたしは中止した。せざるを得なかった。

命^{から}辛々逃げ帰ってきたのである。

『いやはやこんな馬鹿なはずはない。これでは誰も楽しめない。楽しめるはずがない！

いやはや、酷い目にあったものだ！ ああ、何ということだ！

どうやら間違ったらしい。何しろ、正規ルートではないからな。もつと丁寧に調べようではないか。

ともかくも最初の I E 体験は史上最悪であつた！』

そう自分に言い聞かせ、忍耐強く調べ直した。

いく時間も暖炉の前に深々と坐って、キャラバッシュパイプを燦らせながら研究した。

『ふむ。なるほど。

結論から言えば、わたしにさほどの間違いはなかったようだ。

どうやら I E のルールで、最初は誰でも辛い過酷な環境に投げ込まれるらしい。

しかし、正規にアクセスすれば、最初に 2 ポイントがもらえるが、わたしの場合は不正アクセスなので、ポイントがない。それゆえ、まったく幸運がなく、余計に厳しい状況下におかれたに違いない。

ふむふむ。

本来なら進路へのヒントが与えられ、うまくいけばアカデミアという学校にたどり着き、そこで I E で正しく生きるための基礎学を身につけられるのか。

うーむ。

なるほど、それを身につけて、さらにQ D Qがアップするという仕組み、か……

かくして本格的にI Eのワールドにデビューする、と。
ふむふむ。

さてどうしたものか』

夢中になって考えていたので、散歩の時間が来てもほとんど無意識にご主人の胸ポケットに入っていた。

そんな忘我の様子を横目で見てシベルが羨ましげに言う、
『かなり楽しいんだろうな』

ちなみにわたしたちは散歩のときしか接触の機会がない。普段それぞれの飼育箱等にいるからだ。

『むろんだ。』

君も来るかい？』

『え、俺も行っているのか』

『何を言っているんだ。』

来てくれよ。どうやら一人じゃ生きるのが大変過ぎるようだ』

『なあんだ、早く言えよ』

『そっちこそ来たかったのなら、早く言ってくればよかったのに』

『そうか、わかった。』

じゃあ、早速、いまからどうだい、イシュ（わたし、イシュマエルの愛称だ）。俺に解釈学を教えておくれよ。

そして一緒に出かけよう』

『了解。』

簡単なことさ。

習慣によって膠着した固定概念を外して自由意志を持つただけだよ。人間がなかなかできないのは対象化への意志というか、対象への執著が強過ぎるせいなんだ。

結局彼らが客観性の獲得という美辞麗句で為したことは、対象のより一層のリアルを追求したに過ぎない。要は相も変わらず所有への欲望、つまり対象化への欲望なのだ。

要は、解脱すればいいだけのことなんだよ。

解釈学っていうのは、様々な説明が可能だが、ここは東洋なので、東洋らしく言うと、仏教風に、

―― 照見五蘊皆空、度一切苦厄

（存在が感受想起構築認識で、それらが

実体のない空であることを睿らかにし、

すべての苦しみを超越した）――

ってことなんだよ』

そのように言うと、シベルは眼を丸くしたが、深く頷いた。

わたしたちは人間のように対象化への欲望が強くないので、彼はたちまち解釈学を修得し、この世が現象であることを完全に会得した。

『こんな簡単なことか。

もっと早く知りたかったぜ』

そう言ったよ」

私は非常に感心し、また人間にとっても得るところの多い、有益な話であると感銘した。

私は話の続きを彼にせがんだ。

「もちろん、いいとも。

かくしてシベルとわたしは意気揚々と冒険の旅に出る準備をした。

シベルも敢えてハムスターの姿を選んだ。

さらにインターネットから収集した様々な情報を鑑み、我々は入念に装備を研究した。わたしの経験からも装備が大事であることがすでにわかっていた。

わたしの経験は寒い場合であつたが、暑い場合もありえるらしい。

よって暑い場合や寒い場合などなど様々な状況を想定した装備をすればそれに越したことはないが、あまりに重過ぎるとあの過酷な環境の中で、素早い動きができなくなってしまう。

『虎だけじゃない。

熊や狼もいるらしい。北方系の、餓えて大型の、ね』

わたしがそう言うと、シベルは一言、

『銃や剣や槍を持っていけばいい。かさ張って、邪魔で、重いと言うなら、小型軽量折りたたみ式にすればいい』
『なるほど。』

君は傭兵のように実戦家だね』

とは言え、問題はまったく解決していないのだ。

マウスです、とユーザー登録することもできない。メールアドレスもない。すなわち正規ユーザーにはなれない。劣悪な状況でのスタートはやむを得ないのだ。

シベルが言った。彼は実にしたたかな知恵に長けていた。

『むろん俺たちにはポイントがない。』

だが俺たちのデジタルデータを書き換えればどうだ？ アイやギゼクに尋ねれば、きつとわかるんじゃないか。

もつともあまりやり過ぎちゃ、ゲームとして面白くななくなっちゃうがね』

わたしたちは散歩のときにアイに頼み、家に帰ってから無線でギゼクに尋ねてもらった。

翌日、アイはギゼクの出した答を伝えてくれた。

わたしはいつもこうやってPCのギゼクの叡智を拝借していたのである。

わたしはハッキングし、長いメモを元に書き換えを行なった。

『あまり派手にやるとバレるぜ。』

かと言って、どうせならちつとばかしリッチにいききたいからな』
『承知しているさ。』

しかし単にQ D Qだけ取得すればすべてよし、というわけでもないことがわかってきたよ。

正規でないということは様々なリスクが伴う。

まず服や装備が備えられない。システムが利用できないからだ。

正規ユーザーはQ D Qだけじゃなく、所持金も与えられるが、それがまったくない。

つまり、よく考えて、どんな状況にも対応できるよう、ゲームのシ

システムを利用せず、自前で準備しなければならない。
シベル、思ったより時間がかかるがいいかい？』

『何をいまさら。』

俺たちは人間みたいに急がないのさ。命は短いけれどな』

わたしは笑った。

さて。作業は想像以上に大変であった。

人間の解釈で言えば、A4のレポート用紙に8千枚分のメモをベースにわたしたちは入念な偽装工作を行なう必要があつたのである。

シベルと手分けして二週間かけて行い、ようやく終えたとき、額の汗をぬぐいながら、わたしたちは大きく嘆息する。

『やっと終わったぜ』

『ああ。完璧な偽装だ。』

不正アクセスではあるが、すでに十分その償いはした気分だね。

正規アクセスの方がどれほど楽なことか』

『ああ。』

俺だって正規アクセスできるものなら、そっちの方がどれほどよかったかわからないぜ』

『仕方ないさ』

わたしはそう言ったもんだ」

第四節 Isëa Earth イデア・アース

さて、知的好奇心旺盛な読者諸氏のために、解釈学のための大事な奥義を伝えよう。それはこうだ、

-†ā!ā@è³zāšā,ā,Šāāā—è³zā½āā@¶āf>ā½āā“ā,ā,ǰā,Œā°ā,ā,ǰ“ā°!ā...
·ā½“ǰš,ā«æ%āā,ā,ā“āā_āšāā,āā,ā—āā—āāèŠŸā·è³zā½āā@¶ā Œā”
_æŸ½ā½āā“ā,āYǰā™ā,ā“āā,ā,ā,Šī¼^āYā“ā~ā°āŸæ³%āā...%ōī¼%āāā
ā½āā@¶āāāā“āšāāāā—ā™ā,ā“āā_āšāāāāāāāā!ā,ā,ā,āā,ǰ“æ-†āāā@¶
ā@ā, %āā³¶ǰ“±ǰ‘ēāāāāšā·ā`āāšē†æ-†āā,æ,ā,ā!ā,ā,āāā,éē†ā«āāšē†

æ-†â@ä½œâ@¶âŒç”æ-†âçš,ä½œâ“ä,æ,ää¾ä,,ä,ä,i¼^ç’ä°•ä°éš†ä^a
ä©i¼%œä¾äYâŒæœœèj’äšä_èšYäè³zi¼ç”æ-†â!âŒ

少し長いが憶えられただろうか。いかがか？　つまり奥義などないということだ。

私がイシュから学んだ多くはそれに尽きると言っても過言ではあるまい。

この現実が真実ということだ。だから現実なのではないか。トートロジー（同義反復）だ、まったくもって…

「それでどうなったのですか」

「真の冒険が始まったのだ。君も話を聞きながら空想をたくましくして、わたしたちとともに旅立つように想像したまえ。心の翼は常に自由である。

さて。

シベルとわたしは城門の前に立っていた。

そこは信じがたいほど巨大なゲートだった。

雲よりも高い。

左右にどこまでも長く城壁が続いている。

デジタル信号で表象する世界には物理的な制限などないのだから、考えられないほど巨大な建築物があっても不思議はないのだ。

それは胸壁を備え、黄金に輝く石造りの門だった。聖句の記されたクリムゾンレッドの巻き物スッロールが巻きついている。

アーチ門の上には紋章のレリーフがあった。へびと鷹と獅子と翼のある大角の牛がデザインされている。

門衛が現われた。

3メートルはあろうかと思われる大男で、いかにも百戦錬磨という感じの革鎧は疵だらけだ。鉄の兜をかぶり、その上には大角鹿の角が二本ついていた。

『さあ、自らを明かせ』

これはすなわちIDとパスワードを出せ、という意味だ。

わたしたちは指で宙空に描くように、自分たちのIDとパスワードを空間上の半透明の板に表明した。

ただしいずれも偽造だ。

わたしとシベルは門衛の表情をじっと見つめた。

ギロつと巨漢は我々を訝しげな目で見下ろす。

やばいか？

『よろしい。』

では行くが良い』

扉が開いた。

扉の向こうは相変わらず真っ暗闇である。しかも轟々音がしている。入る前からすでに冷気が頬をなでる。

『グズグズするな、さあ、行け』

もう行くしかなかった。

わたしはシベルの顔を見た。彼もわたしの顔を見ていた。

『行こう、行くしかないよ』

『おう、わかってるさ、行こうぜ』

わたしたちは飛び込んだ。

率直に言って、状況は何も変わらなかった。

凄まじい吹雪、寒さ、痛い氷の礫、そして暗黒。

西も東もわからない。

だが、想定範囲内だ。

想定範囲外のこともあった。

用意していた防寒具を素早く着用し、強いライトを点灯する。照らした先に、爛々と燃える凶暴な双眸があった。

『サーベルタイガーだ！』

わたしはいつぞや対峙した生き物が何であるかをはっきり確認した。長剣のような牙を持つ獰猛な巨体の肉食獣である。

タイミング良すぎないか？　そう思う時間もなく、猛獣が飛びかかってきた。先に立っていたシベルは武器を出すタイミングもなく、跳ね飛ばされる。わたしは無意識に大剣を抜き、突き出す。しかし激し

い衝撃で剣は手から外れ、わたしは倒れた。虎が覆いかぶさる。わたしの防寒着と皮膚が巨大な爪に破られた。

しかし剣は我が手を離れていたが、虎の口から入り、喉を裂き、頸骨を砕いてうなじから突き出ている。

さらにはシベルがいつの間にか虎の背後に回り、その背に乗って脊椎に大剣を突き立てていた。

断末魔の声を上げることもできず、猛虎は絶命する。

『やったな、イシュ』

息を切らしながら、シベルがわたしを助け起こし、

『こうもうまくいくとは思わなかったよ、こんなに暗くて、ライトの照明だけじゃ武器もうまく使えない』

わたしも雪を払いながら、

『いや、驚いた。まさかこんなにいきなり。まるで待っていたかのようだった』

『おいおい、そんなこと言うなよ。俺たちのことがバレているわけはあるまい』

『それはそうだが』

『そんなことより傷は大丈夫か？』

『ああ、かすり傷だ。本当に大したことない』

『そいつは良かった。』

化膿しないように気をつけよう』

『心配いらないよ。』

君こそ大丈夫か』

『ああ、俺も大したことないが、少しやられた。見てくれよ、ああ、リュックが破れて食糧がどこかへ飛んじまった』

『探してみるか』

しかしよほど飛ばされたのか、雪に埋もれていくら照らしても見つからない。

『もういい。いつまでもここにいるのも危険だ。さ、ともかく行動しよう』

そう言うと、シベルは荷物から折りたたみ式の櫓そりを出し、

『さあ、手伝ってくれ』

『おい、どうする気だい？』

『決まっている。この大虎を運ぶんだ』

『何だって？』

『そうさ、毛皮にすれば高く売れるぞ』

『しかしこの状況で、こんなもの運べるものか』

『やってみなけりや、わからんさ』

『無茶だ。いったい、どこまで運ぶ気だ。我々の何倍もあるんだぞ』

『だから櫓があるんだぜ。』

イシュ、おまえが不正入手したマップによれば、ここから十数キロ下ったところに炭焼きの廃屋があるはずさ。

とりあえずそこまで行こう』

『馬鹿な。』

激しい吹雪の中を、こんな大きな重たいものを引っ張って十数キロも進めるわけがない。

ただ歩くだけでも必死なのに』

『やってみなけりやわからんさ』

しかしすぐにわかった。

まず動かない。

『それっ、よいっしょ！』

ずずっ。

ようやく少し動くと、あとはいくらかたやすく動いた。ほんのいくらかだが……

十数キロどころか、十数メートルも行くと、我々は息が切れた。

『おいおい、シベル、これは無理だぞ』

『しかたない、吹雪が止むまで待とう』

『いつ止むかわからないんだぞ』

『待つしかないさ』

『馬鹿な！』

『莫迦もクソもない。それが現実さ。』

さ、雪でドームを作ろう』

『無理だ。』

ここの雪はサラサラで積み上げられない。それに風で飛ばされているから見た目ほど積もっていないんだ』

『携帯暖炉を出そう。』

少し溶かして水を塗りながら固めよう。それしかない』

『いやはや。君は温度計を見たか。マイナス三七度だぞ！』

ともかく我々は作業を始めるのであった。暖炉をつけた。暖かさが手袋を通して手にも沁みる。

『さ、とつとと始めよう。暖まっている暇はない』

シベルがそういう。わたしは無言でうなずいてまず虎の上に雪を積んだ。その上に少し暖めた雪を載せて漆喰のように塗った。

『シベル、君は天才だな。どうにかやれそうだぞ』

そのとき狼の遠吠えが聞こえた。

『まずい、イシュ。早くこいつを隠そう。せつかくの虎が食われちゃうぞ』

『しかし我々の身も危ないのでは。』

どこかへ避難すべきではないか』

『それでもかまわんが、いったい、どこへ？』

狼相手に逃げ場があるならばいいぜ』

『森の木の上なら安全だ』

『わかった。』

しかし狼つてのは森に住むんじゃなかったか？』

『……』

『つまりおまえは狼がいる方へ向かって行こうと言っているんだぞ』

『すまない。ここにシェルターを作るしかないようだ』

我々は大至急、たてあな堅穴を掘り、その穴を雪で作った低いドームで覆い、入った。いままで耳をつんざいていた風音がぴたりと止む。いや、遠くかすかに聞こえてはいたが、一瞬無音になったように感じられた。

ホッとする。

するとまた狼の遠吠えが聞こえた。

『近いな。さっきより近くなっている』

シベルがそう言った。

すると近くを数頭の獣が歩くざくざくつという音。雪伝いに響鳴する振動だ。遠い風音に混ざって感じられる：ぞっとした。

『俺たちの臭いは嗅げないと思う。ともかくじつとしていよう。それにしても安心したら腹が減ったな、イシュ』

『缶詰や乾燥パンや塩漬けの干肉を持って来ているから食べよう』

『いや、待て。食べるのは控えよう。さっきだいぶ損失した。いま持っている分だけで何日か食べていかなければならない。温存しておく方が賢明だ』

『しかし空腹のままじゃ体力が続かない』

『わかってるぜ。だがもう少し耐えて状況を見極めよう。最悪は撤退だ』

『わかった、君の言うとおりにかもしれない』

『ああ。畜生、そうは言っても俺も空腹で堪らん』

『ああ。本当だよ。くらくらする』

我々は寒さと飢えと恐怖に耐え、狭くて暗い雪の下でじつと耐えた。眠気が襲うが、眠ってはいけないことはわたしもシベルもよくわかっていた。

『何か会話をしよう、シベル』

『いい考えだ、イシュ、何か話してくれ』

『えーと、そうだな：：うーん、何かな：：』

『おい、聴いているだけで眠くなってくるじゃないか』

『すまん、ええっと、じゃー』

だがすぐに無口になってしまったのであった。それでもどうにか：：意識を維持する。

数時間後、シベルが小さな穴を開けて覗いた。

『気配はないな』

そのとき遠く遠くかすかに狼の群れの遠吠えが。

『よし、念のためあと一時間待ってから外に出よう』

シベルが言い、わたしは頷く。

『少しだけ、何か喰うか、イシュ』

『シベル、それは素晴らしいアイディアだ』

わたしたちは一つの缶詰を分け合う。

一時間経ち、外に出るともううつすらと明るくなっていて、吹雪はほぼ止んでいた。

我々は虎が無事であることを確認し、橇で牽いた。日が昇ると、自分たちが高山の嶺に近いところにいることがわかった。

周囲は雪と尖った銀色の岩で荒涼としている。

炭焼小屋は狼が来た森の中にあるはずであった。二時間ほどぜいぜい云いながら進むと、森が見え始めた。

かなり下の方で、そこへ行くには急な下り斜面に行くことになる。

『滑るか？』

シベルが言った。

『出来るかな』

『俺に任せろ』

シベルの指示でわたしは彼に協力して虎を橇から降ろした。すると彼は橇を持ち上げて虎の背に鞍のように載せる。

『さあ、これで出来上がりだ。乗れよ』

我々は凍った虎にまたがって、斜面を滑り降り始めた。シベルは虎の口にロープを噛ませ、それを巧みに操って頭首の向きを変え、操縦する。

『うわっ！ ひゃあっ！ ひゃ！ うひやつっ！』

雪を削って噴き上げ進らせながら、尖った荒岩を次々と避け、ときに激しくジャンプする。ジェットコースターとロデオが合わさったような乗り物だ！

数キロを一気に滑降した。

『意外に簡単に森に着いたな。』

俺はてつきり二、三日かかると思ったぜ』

『わたしにはとても簡単とは言えないよ。死ぬかと思った』

ともかくも周囲を警戒しながら炭焼小屋を探した。

『シベル、熊がいる可能性もある』

『何だつて！ 一難去ってまた一難か。』

早く教えといてくれよ。で、どういうタイプの熊だ？』

『灰色熊だ。グリズリー (Grizzly) ㄖㄥ』

『凶暴な大型種じゃないか』

『ああ。現実世界だと二、三百キロが普通らしいけど、ここのグリズリーは五百キロ級が平均らしい。なかには八百キロとかも』

『怪物だな。』

うれし過ぎて涙が出そうだ。小屋を探すのに何かよい道具はないか』

『A R 附ナビがある』

『どうして早く出さないんだ』

『いや、一応反則品だし、実際、昨日は使えなかったんだ。G P S 機能がダメで位置情報が取れなかった』

『わかった。』

しかし俺たちにルールは関係ないだろう。まあ、いや。これから使えるものなら、ガンガン使おうぜ。何しろ、Q D Q が附かないんだからな。

で、いまはどうなんだ。使えるのか、まだダメか』

『待ってくれ。やってみるよ』

スイッチを入れ、使えることがわかった。

『これでだいぶ助かるな』

我々は炭焼小屋に着いた。見るからに廃屋の様相だ。扉は開いていた。

『やっと一息つけそうだね』

『ありがたいぜ』

しかし入ろうとすると……

巨大なグリズリーが振り向いて我々を睨みつけた。グオワーツと吠

えて立ち上がる！

『うわーっ！』

わたしの方は腰が抜けて立ち上がれなくなる。シベルが瞬く間もない早技で投げ槍を熊の喉に突き立てる。ぶ厚い皮下脂肪を貫通し、動きが止まった刹那、極寒冷地仕様の外套から50口径の500S&W マグナム (500 Smith&Wesson Magnum) を出し、ぶっ放す。

本来、この世界のルールでいけば、かなりQ D Qが高くないと、こうした高度な武器は手に入らない。また、手に入るとしても、Q D Qが下がることを恐れてこうした殺戮に利用できる武器を持つ者はほとんどいないのが実情らしい。我々はルール無用の侵入者だから出来るのだ。

グリズリーは斃れた。

『ふう。』

明るくなればいろいろ出来るもんだぜ』

こうして我々は虎と熊の毛皮を手に入れた。荒み切った古い崩れかけた小屋を少し補修し、戸締まりを完全にして熊や狼や虎の襲撃に備え、防護体制を整える。

シベルが鋭利なナイフを出し、器用に皮を履いで解体し、肉は携帯コンロで炙って食べた。臭みが強かったが、持参の食糧を温存するためにはこうした現地調達の食糧は貴重だ。在るものすべてを無駄には出来ない。

『これで風呂に入れば最高だな』

『しばらくの辛抱だ、シベル』

『なら、いいけどな。さあ、寝ようぜ。もうくたくただ。睡眠は何より大事だぜ』

寝袋を出してよく眠った。

翌日。

『一番近い村はどこだろう。』

いや、村でなくてもいい。村がなければ一番近い人家はどこだ』

わたしはナビを見た」

第五節 農夫ジャンジャックとリヴォロー村

安楽椅子のイシュはパイプの灰を灰皿に落とした。再び木箱から煙草を取り出し、丁寧にパイプに詰める。

「ナビゲーション・システムを使ったのだ。我々は正規ユーザーと違って、Q D Qの貯まるのを待つまでもなく、最初から様々なアイテムの使用が可能だったからだ。

『農家が近いな。ジャンジャックという豪農らしい。』

ここから、さらに十数キロ下った山の中腹だ』

『また十数キロかい、イシュ。』

舗装された道ならともかくこんな尖岩や絶壁や氷雪だらけの道のない険しい土地を十数キロ行くのは数日がかかりだぞ』

『ここに来るまで、そんなにかからなかったじゃないか。平地に近づくほど地形も歩きやすくなる。』

思うほど難しくはないかもしれないよ』

『楽天的だな』

『いや、君にそう言われるとは意外だ』

『ルートはどんな風なんだ？』

『ナビで見える限りは北の斜面は扇状のなだらかな傾斜だ。』

中腹に森があり、少し行くと開けた場所に出るらしい。そこまで着けば農家まで数キロしかない』

『わかった。』

わかったが、北斜面ということは雪が凍っている可能性が高いぞ。

危険じゃないか』

『そこは君の腕に任せるよ』

『ありがたいね』

今回は案ずるより産むが易しの典型となった。

我々は皮や肉などを櫓に積み、斜面を見下ろした。見晴らしは良い。

青い空、深く黒い森、白い雪、中腹のやや開けた平らな場所に、煙突

のある赤い屋根の農家が小さく見える。

『おお、これは行けそうな気がするぜ』

滑降した。凍結はあったが、それほどではなく、うまい具合によく滑ることができた。中腹まで来ると荷を積んだ櫓をロープで引っ張りながら森を進む。

途中から獣道が現われ、それがやがて細い道となった。

『進行方向は間違っていないようだね、シベル』

『ああ。だがこいつを見ろよ。何だこのたくさんの足跡は』

わたしは身をかがめてよく見た。長い体毛がある。すごい悪臭だ。

『オークだ。』

またも苦難が襲って来るのか。こいつはいままでよりさらに危険だ。

知能があるし、複数だし、武器を持っている可能性が高い』

『ともかくここまで来たら急ぐしかない』

森を抜け、開けた場所に出る。遠くに茅葺や石葺の棟を連ねた大きな農家が見えた。

『もう少しだ。あそこまで1時間ぐらいか』

日が高いうちに着くことができた。

門を敲くと、門番が顔を出す。

『何だ、おまえらは』

『旅の者です。』

途中で虎と熊を仕留めました。我々には荷物になってしまいうので、どうかこの皮を買い取ってもらえませんか』

最初、藁の敷かれた狭くて汚い部屋に案内されたが、出て来た番頭が皮を見るなり、眼を丸くし、

『少し待て。』

ご主人と相談するから』

すると、今度は暖炉と毛織絨毯のある応接室に案内され、羊毛を詰めたソファに坐らされた。出て来たのは、ジャンジャックその人であった。彼は三十代半ばで農夫に見えない、上等な服を着て洒落た巻き毛の優男だった。

山の斜面を利用したジャガイモや葡萄造り、併せて牧羊や養豚や、牛や山羊の搾乳、こんな山奥で多く人を雇って多角的に経営し、成功していた。

ジャンジャックは毛皮を見て、眼を輝かせた。

『すごい。見事だ。』

サーベルタイガーは数が少ないし、獰猛だし、狩られることなど何十年に一度あるかどうかだ。このグリズリーも、皮を見ただけでも、どれほど大きいかよくわかる。

結果的に幸運だったが、こんな奴らに出遭うなんて不幸だと言いやうがないよ』

我々は金貨数枚を手に入れ、是非泊まっていくように勧められた。

『最近は何事なんだ。』

夕方以降の時刻は出歩かない方がいい。オークが頻繁に現れるようになった。うちの農夫や村人が襲われたことが何度もある。オークだけではなく、ゴブリンもいる。奴らは狡賢く、暴力ばかりでなく、騙して奪ったり奴隷にシタリ売り飛ばしたりする。オークが野蛮な暴力を振るうのとは少し異なる。巨大なトロルもいる。ここでは群れを成しているのを見たと言う者もおるくらいだ。ドワーフは邪悪ではないが、人間を警戒し、我々の味方にはなってくれない。わずかだがワーウルフを見たという者もいる。

悪いことは言わない。一晩泊まって朝出発した方がよい。

それで、一緒に夕食はどうかね。よく乾いた温かい布団のベッドもある。

客はめったに来ないが、もてなしの準備が好きなんだよ』

いくつもの暖炉に囲まれた長テーブルでの晚餐は素晴らしいものだった。ここでは雇われた農夫も召使いも一堂に会して食事をする習慣らしい。

けして豪華でも贅沢でも上品でもないが、昨日までの生活とはまるで違い、天国と地獄のような差があった。

シベルも満面笑で、快活多弁だ。だが出された葡萄酒とデザート

チーズを口にすると、表情が一変する。

『おい、イシュ、こいつを食べてみたか』

『いや、まだだ。いったい、どうしたんだ』

『いいから食べてみろよ』

うまいっ！

何てうまいワインだ。チーズを口に含む。おおっ！ 何て芳醇な、味わい深い。凄い。とても旨くて、旨過ぎる。

我々の表情を見てジャンジャックも察し、

『最高だろ。』

うちのオヤジはワイン造りの名人なんだ。隠居したがこれだけは未だに止めない。一族郎党みんな楽しみにしているんだ。こんな雪深い峻しい山奥でどうしてブドウが採れるか不思議に思うかもしれない。

しかしこの地方にしかないブドウがあるんだ。短い春夏秋に実る特別な奴がね。寒さや乾燥、日照の不足に耐えるために皮が分厚くて糖分が多い。度数が高くてタンニンの強い濃いめの奴が芳醇に醸されるんだ。

環境の厳しさがここではすべて良い面に出る。生ハムも滋味深く素晴らしい豊潤な旨みが噛むほどに滲み上がるよう仕上がる。

それにチーズ。こんなに濃厚で複雑で旨いものはないよ。これはお袋のお手製だ。彼女もチーズ造りの天才なんだ。

おれは町に行くとき直ぐに帰りたくなるよ。何たってこのうまいワインとチーズがないからな』

シベルが意味深な眼付きでわたしを見た。

『おい、おい、イシュ、これは使えるぞ』

我々は早速交渉し、毛皮の報酬としてもらった金貨の一部を、ワインやチーズと交換した。

『使っていない馬車があればお借りしたいのですが。むろん謝礼はいたします』

『あるよ。』

安価で譲るから持って行ってくれ。朝になったら見せるよ』

ジャンジャックが用意してくれた部屋は快適な来客用寢室だった。

部屋に入るなり、わたしはシベルに提案した。

『様々な状況を鑑みて、ノースを呼ぼうではないか。』

彼はモルモットの騎士だ。オークが巷を跳梁跋扈する中で、安全に積み荷を馬車で運ぶにはもう少し数が欲しい』

『同感だ。俺もそれを考えていたところなんだ。できればノース以外にも呼びたい。多い方がいい。』

いったんログオフするか』

我々はその晩、暖かい布団で体を伸ばし、ゆっくり眠った。

さてログオフし、散歩の時間を待つ。

現実には相変わらず雨降りだった。

『ノース、どうかね』

わたしはベビーカーとの四つの仕切りのうちの一つにいる縮れ毛長毛種のモルモットの彼に率直に訊いた。今日は、房飾りや紐飾りの付いたクラシカルなミリタリ・ロング・コートを着て、フランス第一帝政期のような帽子をかぶっている。

『イシュよ、あなたとシベルの話が聞こえていたのでなんとなくわかるが、詳しい話を聞こう』

隣の仕切りにいるシベルが仕切りから身を乗り出してこれまでの状況を説明した。

うなずきながら聞いていたノースは言った、

『喜んで行かせていただこう。』

私も冒険は大歓迎だ』

すると、同じく仕切りの一つにいたミニチュアダックスフンドのジユールが口を挟み、

『ぼくも連れて行ってよ。ぼくも行きたいんだよ』

シベルがたしなめた。

『おまえはまだ生まれたばかりだ』

『もう一ヶ月も経ってるよ。もうすぐ一人前だ』

すると、今度はロフトにいたひよこ三兄弟（アルス、ポトス、アミス）が、

『それならばくたちも連れて行ってください。ぼくたちだってもうすぐニワトリになるよ』

シベルが何か言おうとしたが、わたしはさえぎり、

『わかった。君たちの気持ちは立派だ。』

経験は何よりも知識を育て、心を養う。

一緒に行こう。様々な困難はあるが、命にまでは及ばない。

若いうちに学ぶことは重要だ。そのためにはたくさんの経験が必要だ。シベル、君の心配はもつともだが、しかしともに行くべきだとわたしは思う』

シベルが顰め面で頷く。

『わかった。異存はない。そうしよう』

わたしはこれをもって黎明期と名附ける。

すなわちわたしが単独で闇雲に渡った混沌期からシベルと二人で奮闘した苦難の時期までを暗黒時代としたときにこれと比してそう呼ぶのである。

『さあ、シベル、しかしながらわたしたちの経験を活かして出発前にみんなにIEでのことをいろいろ教えようじゃないか』

そして勉強会を開くこととなったのだが、いざ始めようとすると、ミニチュアダックスフンドのジュールはチュニックの上に胴鎧、脚に脛当てを巻きつけて騎士の従者のような姿で現われ、しかも友人の三毛猫、ミニーニを連れて来た。ミニーニもまだ生後一ヶ月ばかりのメスの子猫だ。

『彼女は料理ができるんだ』

自信満々に笑みを浮かべてジュールは言った。

『あんな…』

シベルはまたも何か言おうとしたが、またまたイシュがさえぎって言う、

『よろしい。しかし君は彼女に責任を持つんだぞ』

ジュールの顔が一瞬真剣にこわばり、戸惑いを見せたが、かと言つて後には引けず、

『むろんです。連れて来たほうが男の子として責任を持ちます』

わたしは笑いながら、『よし、よし』

シベルも笑つて、

『わかったよ。君に任せよう』

予定外の参加者はミニーニだけではなかった。ムササビのベンダムが忍者のような黒尽くめの格好で現われた。

『どうしても行かせておくれよ』

わたしはまたも拒まなかった。

『わかった。君も来たまえ』

かくして我々は9名となったのである。

短い学習会の後、直ちにIEにアクセスした。通常であれば、ノースら新参組はゲートから入り、わたしとシベルが経験したような苛烈な状況からスタートすべきなのだが、ショートカットし、ジャンジャンの農場の前で一同馬車に乗り込む。

そもそも不正アクセスなので（止むを得ないことだ。いったい我々がIDを取得し、マウスとして登録可能であろうか？ 人間は差別的だ）、正規ルートを通らないことも可能なのだ。

『君たちは経験しないが、草創期の困難・苦労を歴史として知っていてもraitたい』

わたしはそれだけを言い置いた。そして、

『さあ、出発だ』

意気揚々と雪の道に馬を歩ませたのであった」

イシュはアームズチェアに深々と身を沈め、眼を瞑った。どうやら疲れたらしい。

私は早く続きが知りたくて彼の記憶の中に入って行つた。時々わからないことはシベルやノースに聞いた。輝かしい彼らの物語を私は恍惚と楽しんだ。

かつてオシアンの物語に酔い痴れた西欧の人々のように。

第二章 黎明期

第一節 オーク

手綱を握ったのはシベル。その左右にひよこ三兄弟とジュール。シベルは彼らに馬車を牽く馬の馭し方を教えた。いずれも完全な防寒着を着て分厚い手袋をしている。

その日の朝は吹雪だった。外にいる者は要塞のように堅牢で分厚く頑丈な防寒具に身を包まなければならなかったのである。ノースとベンドムが剣を持って馬車の前後に立った。オークを彼らは警戒していたのだ。何しろ、ジャンジャックに散々脅かされていたから。

しかし意に反し、最寄りの村に夕刻前に着いた。村名はミレアといい、つづら折りの坂道に石造りで三階建ての家が数十軒ばかり連なっている。イシュはさっそくめばしいボール（BAR。PUBなどと同じ。立ち呑みの安酒場）に入って交渉を始めた。

「凄い上物なんです。」

逸品ですね。誰にも知られていなくて、一族の楽しみのためだけに作っているんです。だからコストも何も関係なし。商売しようとする者は金持ち相手でなくてはこんな物作りはしません。どうです、試飲してみてくださいませんか」

亭主が疑わしげな顔で一杯グイツと呑む。

「おお！」 表情が明るくなっていた。「これは素晴らしい」

「どうです。決して高くはないでしょう」

「わかった。どれくらいある？ 何？ 本当か？ それしかないのか？ よし、全部くれ」

イシュは戻って来るなり、ほくほく顔だった。

「さあ、これではらくはこの世界で暮らしていけそうだ。金儲けは

性に合わないが、食えないのは辛いからな」

ノースが言った、

「もつと買い付けよう。そして大きな馬車でキャラバンを作り、豪華な屋敷を立てよう」

シベルも頷いた。

「そうだな。あちこちの農家に自慢の自家製チーズやワインが埋もれているに違いない。それを掘り起こして世に知らしめ、飲びを共有しよう」

イシュは決断した。

「わかった。では早速このA R附ナビでそれらしい農家を探そう。いや、何となくわかりそうさ。」

さて、今晚は野宿して、明朝すぐに出発しよう」

その晩、シベルはベンダムを連れて村の酒場などを歩き回り、情報を収集した。帰るなり、

「それほど情報はなかったが、ここから数キロメートル行った先にあるグレース谷^{バレー}に点在する農家に逸品が眠っていそうだ」

「うむ。わたしもナビを見ていてその辺の農家が気になったんだ」

「よし、さっそくそこから探ってみよう」

アルス、ポトス、アミスの三羽が声をそろえてそう言った。みんな馬車の中で防寒着のまま、ブランケットや薄っぺらい毛布や藁草にくるまり、お互いに体を寄せ合って眠った。

翌朝、ミニーニは誰よりも早く起きてスープを作る。乾いた薪などないので携帯用ガスコンロで調理した。

「いい匂いだね」

起きて外に出て来たジュールが言った。

「チキンスープよ。昨日のボールで鳥の骨をもらっておいたのよ。香辛料を入れるからあつたまるわ」

「香辛料はどこで手に入れたの？」

「家から持ってきたのよ」

「どうやってこのネットの世界に」

「わからないわ。そうしたいと、強く思っていたからじゃない？」

「そんなことができるとは夢にも思わなかったな。君はぼくには理解できない部分をたくさん持っているね」

「そうかしら」

早朝出発した。寒くて手足がかじかんだ。ジュールが白い息を吐きながら手綱をぎこちなく握った。その左右にひよこ三兄弟が坐った。スープはたくさん作られ、ポットに保存されたので、みんながときどきコップに入れて飲み、暖を取った。谷へはひたすら下りの道だ。雪が次第に少なくなった。

午後に着いてめばしい農家三軒を廻った。どこの農家も大きな家とたくさんの方働者と広い土地を持っている。お互いに離れていたもので、一日でたくさんは廻れなかった。

「しかし大収穫だな」

ノースは微笑んだ。シベルが言った。

「売りさばくのもいくつかの村に分けよう。たくさんあると稀少性がなくなり、値が下がる」

「もつともだ」

彼らは再び山岳地帯に戻り、夕方遅く一つの村に着き、チーズとワインと売った。評判は相変わらずよく、店主は「いつでも来てくれ。大歓迎だよ」と言った。商売は上々だ。儲けた金で旅籠に泊まった。

「最高だわ。お風呂があるわ」

ミニーニが歓声を上げた。

「素晴らしいよ。手が暖かいよ。足先が暖まるのは何日ぶりだろう」
ジュールも歓喜の声を上げる。

「二人だけの頃の苦勞が嘘のようだ」

シベルがしみじみ言った。

イシュもにつこり笑って頷く。

「ああ、そうだね。いま思えばジャンジャックがすべての始まりだった」

その晩は柔らかいベッドでみんなゆっくり眠った。翌朝、次の村に

向かう。三つの村を廻り、大いに稼ぐ。彼らはそれを繰り返した。まとまった金ができる。

「少し装備をそろえよう」

「馬車ももう一台買おうよ」

やがて大量に仕入れるため、近隣の農家では足りず、遠くまで何軒もの農家を廻って数日かけて仕入れをするようになった。山中に野宿することも増えた。それまでは野宿と言っても、オークの襲撃を恐れて村の傍に馬車を止めたのであったが、人里離れた場所に馬車を止めて眠ることもあった。

「できれば農家の傍か、農家の敷地内に泊まりたいが、雪がとても深くて思うように進まなかったな。

次の農家まではまだ遠い。また野宿するしかない」

シベルが顔を顰めた。

「二人ずつ交替で見張りを立てよう」

イシュがパイプを燻らしながら言う。ベンドムが、

「その前にオレが少し周辺を跳んで探索しておくよ。近くにオークがないことを確認しておけば安心だ」

夜9時から朝5時まで、ジュールとノース、ベンドムとアミス、ポトスとシベル、イシュとアルスの組み合わせで2時間ずつ交替して不寝番をすることとなった。

さて、見張りの時間となる。

「ノースさん、どうしてIEにオークみたいな、悪い奴らが罰せられるもせずいられるの？」

「それはさつきもイシュが言っていたらう。

彼らはこの世界を盛り上げるための環境的人物さ。何も事件が起こらなくっちゃ楽しくないだろう。冒険にはならないだろう」

「そうか。

試練なんだね。

でも見張り番って責任が重いよ」

ジュールは任務を真摯に受け止め、あまりにも緊張しているようで

あった。それを氣遣ってノースが言った。

「そう力むな。心配はいらない。敵は深夜、寝静まった頃に襲って来る。」

もし襲って来るとすればだがな。だからこそ君のようなこどもをこの時間に配置したのだ」

それを聞いてジュールはひどく傷ついた(だってひよこ三兄弟もこどもじゃないか、と)が、また安心もした。

ノースも氣休めでそう言ったものの、自分の説に自分で納得し、到底オークが襲って来ることなどあり得ない氣がしてきた。安心した二人はいつの間にか昼間の疲れで眠ってしまった……

ガサガサ。雪をかぶった熊笹をかき分ける音。

「おい、見ろよ、眠ってるぜ」

「ああ、おめえに言われなくなつて見てるから、わかるさ」

「馬鹿な奴らだ。眠っちゃ、見張りの意味があるめえよ」

「どうせこんな時間にやまだ襲ってきやしねーって高を括っているのさ」

「へへへ、その通りらしいな。どっこい、こっちら、プロさ。こういう時間が狙い目なのよ。人生裏をかなかくっちゃ。大人が仕事に出た直後の午前十時に空き巣に入ると同じ原理さ」

「へっへっへっへ」

それは二十数匹からなるオークの盜賊団でした。

「じゃ、野郎ども、行くぜっ！」

「おおおっ！」

たちまち大混乱。ノースやシベルは劍を振るい、銃を撃ち抵抗した。「くそ、銃を持ってやがる。あり得ない」オークが呻いた。しかし多勢に無勢、金や仕入れた品々はすべて奪われた。それだけじゃない。馬車は壊され、使い物にならない。酷い状態だった。防寒着を着ているのは見張り番だったノースとジュールだけ。あとは全部奪われたか

破り裂かれてしまっていた。震え上がり凍える。ブルルル！

「寒くて死ぬそうです」

ひよこ三兄弟が叫ぶ。

「ああ、せつかくの苦労が水の泡だ。畜生！ あれほど見回ったのに！」

ベンダムがそう言って悔しがった。

「ノース、寝ずの番は何をしていたんだ」

シベルがなじる。頭を垂れてノースが、

「すまん。私としたことが」

ジュールは泣いた。「ごめんなさい、ごめんなさい」。

イシュは結論附けた。

「気にするな。所詮は現象だ。もう一度、頑張ろう。幸い、ナビも銃も剣もある」

「そうだ。頑張ろう。それしかない」

皆頷く。逃げてしまっていた馬を探すと、四頭とも近くにるのが見つかる。

「よかった」

ノースが安堵の溜息を。

シベルが言う、

「壊れた馬車の中から何か探そう。毛布があればいいが、布きれでも何でもいい。体に巻き附けるんだ。それで何とか進もう。ミニーニは馬に乗りたまえ。ひよこ三兄弟もだ。そしてジュール」

「ぼくはいいです。歩きます。せめてもの償いです」

「いいから、馬に乗れ」

寒さがさらに厳しくなる。幼い者らを馬に乗せ、雪深い道をイシュがナビを見て、シベルやノースやベンダムが馬を牽いて歩く。靴も室内履きだ。足がたちまち凍りつく。

「ちよつと、休憩だ」

「何だよ、シベル、君らしくないもう休憩かい」

「いや、このままじゃまずい。ノース、おまえはいいが、他は薄い室内履きの靴だ。足にも何か巻きつけよう」

「わかった。すまない」

「さあ、どこへ向かおうか」

シベルの問いにイシュは、

「今日立ち寄った農家に戻るのが一番近いだろう」

ベンダムが、

「どのくらいの距離だったかな、イシュ」

「5 kmくらいだよ」

「この雪道じゃ着くのは午前2時くらいだな」

そう言うシベルの溜息は吹雪にかき消された。

「起きてくれるかな。怪しんで入れてくれないんじゃないか」

ベンダムの心配を振り払うようシベルは、

「ともかく行こう。うわ。寒い。前が見えない」

イシュも皆を促し、

「さあ、気を付けて。ただしく見て。とにかくいまはひたすら気を付けて」

シベルが、

「わかってるさ。道を間違えるなよ」

「わたしも努力しているよ。いま可能性はこれだけだ。このナビが頼りだ」

ノースが、

「経路も大事だが、周囲にも用心しよう。またオークが襲って来ないとは言い切れない」

皆に緊張が走る。「怖いよ」 ジュールがポツリとつぶやく。

「何言ってるのよ、しっかりしてよ。あたしを守る約束でしょ」

ミニーニが怒る。

「ごめんよ。君を巻き込んで」 ジュールがまた泣く。

「謝らないで。あたしが選んだことよ。冒険が好きなのよ。楽しいわ」

「ほんとにごめん……」

「しかしオークが近づいてもわからないな」

シベルが言えば、

ノース「気を付けよう」ベンダム「寒くて考えられない」ひよこ「いまそこに居そうな気がします」

「大丈夫。動きは把握できている。近づけばわかる。いや、むしろいま探しているところだよ」

イシュがそう言った。

数時間歩き、凍えて気が遠くなっていた。手も足も歩いている感覚がない。言うことを聞かない。棒を引きずっているようだ。痛みと疲労。もうどうでもいいからこの場に斃れたかった。

「近いぞ」

イシュが言う。

ようやく農家が近づいたのだ。眼にはまったく見えないが。

その声にやや安堵したせいか、歩きながらシベルがイシュに言う、
「助かったようだな。ああ。」

しかしせっかくだと考えたんだがな。もう商売の再開は難しいぜ。金がないから仕入れはできない」

「いや。そうでもないさ」

やがて彼らは農家に着いた。

門は冷たく無表情に閉ざされている。黒に近い紺色の硬い樫の木の門。

「無理かな」

ノースがつぶやくのを無視し、シベルが敲く。

「昼間に立ち寄ったものです。オークに襲われました」

「オークに襲われました」 皆で声をそろえた。

何十回か叩くうちにどこかに灯が点いたような感触を感じた。見えないけれど肌でほのかな明るみを感じたのだ。やがて音がして、

「誰だね」

「昼間の旅の者です。チーズを買わせていただいたイシュです」

「おお」

「ご忠告を受けながらオークに襲われてしまいました。どうか助けてください」

のぞき窓が開いて誰かがちらつと覗いたような気がした。ぱたんと音がする。すぐ閉じられたようだ。足音がかすかに聞こえ、やがて消えた。覗いた者は建物に戻ってしまったようだ。

「だめかな」

シベルが苦々しく言う。

しばらくして数人の者が雪を荒々しく踏む音がした。

また覗く。門が開いた。

「どうぞ入ってください。たいへんなことでした。すぐ暖かいものを用意させます」

農場主だった。

「ああ、よかった」

ジュールが気を喪った。ひよこたちもミニーニも抱きかかえられ、運ばれる。イシュたちは雪を落しながら屋敷に案内され、暖炉の前に倒れ込んだ。

じきにたらいに満たされたお湯が用意され、手足が温められ、乾いた毛布でくるまれる。熱い濃厚なシチューをスプーンですくって一口啜り、シベルが嘆息し、

「ああ、最高だ」

「こんなにおいしいシチューを飲んだことがない。これが真理でなくて何だろうか」

イシュも同意する。ベンダムも最高に、

「幸せだ」

そう言って唸った。

こどもたちもどうにかスープを口にし、頬に生気を取り戻し、本当の眠りに、深い眠りに就く。

イシュは暖炉の前に雑魚寝しながらシベルに言う。

「これを見たまえ」

タブレットPCを示した。

「おお、これは」

「そうだ。AR機能の付いたマップだ。これはオークどもの現在の居

場所だ」

「奪い返すのか」

「もちろん」

「危険だ。奴らは数が多く凶暴だ」

「夜襲をかけるんだよ。いや、昼襲かな」

「なるほど昼は寝ているのか」

「そうだ。ネット・オークションで銃砲を買おう」

「そんなことできるのか」

「できるさ。わたしたちは正規ユーザーではない」

「それにしてもIEで売る者がいるのか」

「あゝ、不思議なことだね。ここのシステムにも抜け道があるらしい。

あるいはバグの一種なのかな」

「わかった。あるなら、どっちでもいい。オレはやるだけさ」

ベンダムがそう言うと、ノースは剣を挙げ、シベルも、

「よし、それで行こう」

かくして彼らは朝を待ち、ベンダムを斥候として先に行かせ、スマートフォンで連絡を取り合いながら厳しい磐や大木の山中深く分け入った。

「近いぞ」

「そうだな。この辺の地形をよく確認しよう。挟み撃ちや上からの銃撃が望ましい。そういうことができるような場所へ追い込むようにしたいんだ。なければ仕方がない。

ともかく確認して、それから攻撃だ」

「了解。では3つに分散して確認。オークに感附かれないよう気を付けて。いまは午前9時。2時間後にここで」

2時間後に再び集い、ベンダムが報告する、

「よい場所があった。近いよ。

それからオークの居場所もこの目で確認しておいた。ちょうどいい攻撃ポイントも見つかった。

いまと同じく3つの班に分かれて襲撃しよう。そして谷に追い込む

んだ」

「よし！」

彼らが赴くと、オークたちは一匹を見張りに立たせ、他は眠っている。

ミニーニがそこへふらりと出ていく。

「ああ、たいへん、道に迷ってこんな恐ろしいところへ出て来てしまった。あ、どうか、命だけはお助けください」

「おお！　こりやたまんねーぜ。

へへ、お嬢ちゃん、飛んで火に入る夏の虫とはこのことだな。可愛がつてやるからさ、こっちへ来な」

そう言つて武器を下ろす。

シベルがそれを取り上げ、ベンダムがオークの首を折る。

眠っているオークどもに一斉射撃。逃げ惑うオークを羊飼いのように巧みに狭く短い谷間へと追い込んで、谷の入口と出口の上からの挟み撃ちにする。

殲滅し、すべてを取り返すと、この教訓を活かし、イシュはこう言つた。

「油断してはならない。油断は驕慢から生ず。驕慢は敵だ。常に批判せよ。そのためには自己超越的でなければならない。批判されない者は必ず腐敗する。永遠不変の真理だ。権力者や成功者はその頂点で眼が眩むのだ。そして必ずや墜落（堕落）する」

第二節　商の憲法

イシュらは商売を拡大した。

彼はようやくこの世界でも高級なツイードのジャケットを買うことができるようになった。

満足げに新しいブライヤーのパイプに最上級の煙草を詰めて燻らす。寒さと困苦の日々が嘘のようであった。

馬車は二〇台となり、五、六台ずつキャラバンを組んで東西南北に

班を分けて遠征し、良いチーズと生ハムを続々と集める。それら良品は世に喜ばれ、求められ、飛ぶように売れる。

四つのキャラバン隊がイシュやシベルやノースやベンドムなどの大人たちの指揮監督の下に率いられ、補助者としてこどもらが随い、搬送作業は人夫らが動く。だから人夫となるべき人々を募り、人柄を吟味し、選ぶべき良き者を高給で遇した。

たちまち儲けは十倍になった。

そもそも商売繁盛で利益を膨らませるようなコンセプトのRPGではない。よってライバルはなく、まさに「濡れ手に粟」で、儲けたい放題であった。

マントルピースに暖かな薪の火が爆ぜる。炎の明かりが彼らの頬を照らす。ロウソクが揺れた。

イシュはパイプ片手に森厳でクラシカルな書斎で地図を眺める。

「つまりわたしたちは北大陸（ノルテ）の北方、極寒の北の辺境から出発し南下して来たのだ。

神聖シルヴィエ帝国の辺境地、国境附近の磐山からスタートし、針葉樹林の厳しい、世俗権力の及ばない神聖中立地域を通過し、（国が崩壊したせいで）武装集団が群雄割拠するウオリヤーズ同盟国や無政府状態で戦士が好き勝手に略奪を行っているアーマー国を涉り廻っていたのだ。

農民たちは素朴で善良で、極めて明るく振る舞っていたが、どこか鬱々として暗い影があるように感じられた。それもこれも不安定な社会であったために違いない。無秩序にオークなどが跳梁跋扈していたわけこれで明白となったね」

シベルもワイングラスを傾けて、

「様々な混乱と、同民族間での争いの原因はノルテの超大国シルヴィエが適当な理由をつけて軍事的に介入したり、煽動家を送り込んで内乱を起こさせそれを平定すると目と言う大義名分で介入したり、侵略戦争を起こしたりして次々と国を崩壊させ、自国の領土に編入しているせいだったんだぜ」

ノースも剣を磨きながら頷く、

「近代兵器で武装し、圧倒的な軍事力を誇る帝国は東西南北の全ての大陸を支配することを狙っているに相違ない。奴らを制する超大国は四大大陸すべてを見渡してもないといってもいいのではないか。

神聖シルヴィエ帝国の絶対皇帝ジニムイに拮抗できる支配者などいるのだろうか。

南大陸（スール）のマールロ帝国皇帝羅汎か、東大陸（オエステ）の華嚴龍國の天帝眞殷玄か、西大陸（エステ）のメタルピュシカ・インペラスチュートのヴォードか。いやいや彼らとて危うい。

とすれば、このノルテを全制覇することなど時間の問題だろうな」
ベンダムが頬杖を突き憂鬱そうに、

「崩壊させられた国は領土になるか隷属国家となるかそれとも無政府状態で放置されたままだ。くそつ。それ以外のノルテの諸国は連合して対シルヴィエ体制をとっているが、各国の思惑はそれぞれだな。中には生き残りのためにシルヴィエ帝国に内通している国もあるらしいぜ」

イシュは嘆息した。

「期待外れだよ。

ここは現実世界と違って正義が通る世界だと思っていたのに。しかし不可思議だ。帝国だって一般ユーザーによって構成されているはずだ。

わたしたちならともかく、なぜ正規にログインしているユーザーにあのような横暴が可能なのか。

これはまったく謎だよ」

シベルが言う、

「バグじゃないのか」

「こんな壮大なバグがあるのか。根本コンセプトが崩れている」

イシュはそう言いながら気取ってツイードのジャケットのポケットに指を突っ込み、

「いずれにせよ、この北大陸の北部にいるのはまずい。世情が不安定

だし、いつシルヴィエが侵攻してくるかわからない。北大陸の南部へ行こう」

こうして彼らはバーヴァリアン自由領へ移動した。自由領の北の地方都市で、ピューリリンという石造りの要塞の街だった。数百キロ南に移動した場所なので、未だシルヴィエの手がいつ及ぶかわからない地域である。仕方がなかった。世に知られぬ良質なチーズや生ハムやワインが集まっている北から大きく離れてしまうことができなかったからだ。

「いまの商売のやり方ではね」

イシュはそう言い、

「別の事業を展開すべきだ。南でもできるものをね。幸いどの地域でもわたしたちのような商社はない。どこでも成功できる。良いものさえあれば」

イシュはシベルに依頼し、さらに南、つまりカサック、ウクレニヤなどから、数多の優良な港を有する海洋国家、貿易大国ロードへ赴かせた。その小さな都市で活動の拠点となるべき小さな事務所を置くことにしたのである。オリーブ・オイルの買い付けなどを始める。

ある日、ノースはピューリリンにある石造りの建築にある事務所の中のイシュの書斎で軍事強化について強く主張した。仲間内での彼の役割は自然と軍事部門に特化していた。

「事業はまったく問題なく、すべて大きな利益を生み続けている。しかし武装化を緩めることはできない。むしろ逆だ。

武器を買い、人夫を武装させるだけでは足りない。

いまのところ万事うまくいった。馬車の数は百を超え、雇われた者たちにも指揮監督を任せられるようになった。

組織をもっと専門化すべきだ。オークやゴブリンやトロールやドワーフ、野武士や私兵・民兵や山賊から身命や財産を守るため、専用の軍隊を組織することも計画したい」

シベルは反対せず、

「まったくもって商売に関してはどこも『処女地』であり、俺たちは

『濡れ手に粟』の状態だ。どんどん拡張することは悪くない。すべてうまくいつている。

とは言え、完全とも言えない」

イシュもうなずき、

「武装も必要だが、やはり信用できる友が必要だ」

ベンダムが手を挙げ、

「わかった。みんなに声を掛けよう」

ノースもうなずき、

「私もそう思う。是非、彼らを呼ぼう」

かくして贅淋太良のペットのほとんどが欣喜雀躍して参加し、集結した。それは次のとおり。

まずは開拓者の二名。

マウスのイシュ、シベリアンハムスターのシベル。

苦節の世代の七名。

テッセル（モルモット）のノース、ムササビのベンダム、ミニチュアダックスフントのジュール、三毛子猫ミニーニ、ひよこのアミス・ポトス・アルス。

そして今回加わった黎明の時代の十二名。

イシガメの吉郎、トカゲのジョニー、サボテンのラマー、イモリの翔太、ヤモリのサブ라우、豆柴犬の十兵衛、ロシアンブルーのラシア、ロップイヤーのロゴス、モモンガのマカロニ、シマリスのリリ、インコのセイン、十姉妹のハヤテ。

一同は書斎に結集した。

イシュはこう宣言した。

「我々は新しい種族だ。いままでない超異種的な、超越的一族だ。わたしたちは人間を遙かに超える。」

これからはシュール Sur と名乗ろう」

シベルが言った。

「ではおまえが族長 (King) だな。おまえが今日から我々のキングだ。さて、これからどうしよう」

「いまの事業を拡大するのは当然だ。この地図を見たまえ」

「ふむ」

彼らの自宅兼事務所はかつての要塞都市、石造りのピューリリンの主要な大通りに面してある五階建てのバロック風の建築であった。彼らはここで共同生活し、また事務や会議を行うこととなったのである。最上階に、いま一同が会しているイシュの書斎があり、そこにある頑丈な檜造りの大きくて長いテーブルが置かれ、それが会議の場所であった。

アンニュイなアールヌーボー調の色ガラスの傘の附いたランプの光とマントルピースの炎だけが明かりだ。

「まずは南下策だ。これにあたっては南部にある普通のワイン・チーズ・塩漬け肉の世に知られぬ生産者を発掘する。

そして南部では肉の保存に塩が使われている。一世帯で一年間に百kg単位で塩を使う。むろん調味料ではない。つまり肉の保存に使うからこんなに大量に必要なんだ。

現実世界でも冷蔵装置のない時代の欧州などでは塩による保存が普通だった。だからヨーロッパの国によっては塩を政府の専売として安定した収入を得ていた王家もあった。いや、一世帯当たり収入などに応じて買う塩の量を義務付けていた国もあったほどだ」

ベンダムが手を打つ。

「なるほど、我々も塩を押さえるのだな」

「そう。さすがに専売する権限はないが、生産者を掌握し、販売ルートを制覇することは可能だ。事実上独占してしまえばいいのだ。

シベル、君に任せたい。やってくれるかな」

「わかった」

ノースが発言を求めた。

「何だ、言いたまえ、ノース」

「軍部の設立の件だが」

「それは君に一任した」

「武器の購入ルートについて承認を取っておきたい」

シベルも問う、

「何だい、改まって。どこから買うんだ」

「我々が現実世界で知っているような兵器が欲しいんだ。この世界は皆弓や剣や旧式の大砲や投石機じゃないか。戦車と言っても馬で牽く二輪車だし。騎兵隊の一騎打ちが未だに基本だ」

シベルがうめく、

「まさか、おまえ」

「そうだ。秘密のルートを使ってシルヴィエから兵器を密輸入したいんだ」

ベンダムも、

「ノルテの悪の帝国、暴君、ファシスト、連合諸国の敵だぞ」

「武器に罪はない」

シベルがさらに反論する、

「あたりまえだ。だが使う者を制御し切れないから武器を制御するんだ」

しかしイシュは眉根を寄せながらも、

「まあいい。」

確かに使う者の精神の問題ではある。それは真理だが、現実では永遠に達成しないであろう真理だ。しかし我々超越的存在の中では達成できるかもしれない。

武器輸出はシルヴィエにしても諸刃の刃だ。いまでは圧倒的に有利な近代兵器・科学的に高度な兵器の力で他国をまるで紙の軍隊を破るようにあつという間に裂き燃やしてきたのだ。

同じ兵器をこちらが持てばそう簡単にはいなくなる」

だがシベルは反駁する、

「それこそ諸刃の刃じゃないか。進化した兵器は全世界を数千回殺傷する力を持ち、共倒れに陥らせ兼ねない」

ノースが腕を組んで考え込んでしまった。

「ううん」

しばし沈黙。イシュが再度開口する。

「わかった。」

この問題は留保しよう。拙速に決めてはならない。遅滞や躊躇や優柔不断は致命的になることがあるが、場合によっては棚上げにすることも重要な手法なのだ。時が熟するという場合もある。

武器は取り敢えず通常に購入できるものをそろえてくれ」

そう言うってから言葉を続け、

「さあ、わたしからの提案はまだあるんだ。

塩の専売よりさらに先を見据えて、わたしは海洋貿易に手を附けることを提案したい」

ノースが眼を丸くし、

「何と。」

しかし船も造らなきゃならんし、港はどうするんだ。何にしてもものすごく資金が必要だぞ。だいたい、我々は航海のノウハウが全くない。人材の確保もゼロから始めなくちゃならない。

利益を得るまでは時間がもの凄くかかるぞ。いや、そもそも可能とは思えない」

シベルも、

「さすがに突拍子もなさ過ぎる。ムチャだ。あまりに遙かな夢だ」

「そうでもないさ。」

海洋貿易研究チームを作る。ジュール（ミニチュアダックスフント）、ラマー（サボテン）、そしてミニーニ（三毛子猫）にお願いしたい」

「ぼくにですか」

「そうだ。ラマーは安楽椅子の智慧者で、南方に精通している。君とミニーニは若くて新しいアイデアが出せるだろう。

さあ、がんばってくれ。しばらく旅には出なくていい」

さてこのとき役割分担が決まった。

司令部

イシュ（マウス）

北部ルート【チーズ、ワイン、生ハム】

一班 ベンダム（ムササビ）

ジュールが質問した。

「無分別と、美善快を特に愛することとは矛盾しないのですか」

イシユはゆつくり微笑む。

「超越者の認識は我々を凌駕する。」

理窟は、すなわち論理は思考の象りや物事の判断のすべてではない。是非のすべてではない。

さあ、まずは実践しようではないか。わたしたちは既に繁栄の帝道を一途に進んでいる。しかしまだ十分ではない。大いに龍のごとく肯んぜよ。躍進すべし」

第三節 イシユの統治

塩の商人は小規模な個人で、シベルは彼らを雇用して統合したが、その一部はそれをよしとせず対抗した。

しかし結局、個人なのでその前後のルートを抑えられると、事実上、死に体になってしまふのであった。つまり海の生産地からAまで運ぶ商人Aと、Aから購入してBまで運ぶ商人Bと、Bから購入してCまで運ぶ商人Cがいたとき、AとCがシベルに雇われてしまうと、Bは買附も販売もままならなくなるのである。

また産地の人と昵懇になり、そこから高価で買い取ったので、自ずと独占体制は構築された。塩の事実上の専売はシユールに莫大な富をもたらした。シユールは一気に巨万の富を築き上げたのである。

「これがある程度還元しよう。そうでなければ恨みを買ひ、いつか潰れるだろう。」

そしていままでの業も大事にしなくては」

すなわちチーズやワインの逸品の買附も引き続き行い、大いに発展させた。

ベンダムは十兵衛やマカロニに北部ルートでの買附をレクチャーする。サムライ精神で賢い豆柴の十兵衛はたちまち要領を覚え、知られぬ農家の名品を探し出すようになった。

それに比してモモンガのマカロニはカウボーイハットをかぶり、革ベルトにリヴォルバーをぶら下げ、威勢が良いがいい加減で調子のいいキャラクターなので、懷中時計を片手に思案顔の学者ロゴスとの組み合わせは絶妙と言えた。昔からの知り合いでなければ決してうまくいかなかったろうが、お互い旧知の仲だったので、よく補完し合った。

ヤモリのサブ라우は目端が利き、抜け目ない性格であったが、実直なひよこ兄弟のアドバイスをよく聞いてノウハウがなかった南ルートを巧みに開発し、雇った者たちをうまく制御し、働かせた。

昔気質のイシガメの吉郎と我がままで美しいものを愛好する懶惰なラシア嬢も同じように補完し合うなかである。

美味しいものがある場所を直感的に探し出すラシア嬢の特異な能力に吉郎はいち早く気が付き、良品を見附けると、躊躇なく誠実に交渉したので話がまとまりやすかった。

「おらは水がねえとダメなんだ」

イモリの翔太がそう言った。ハイカラなカンカン帽(仏:Canotier)をかぶって白い夏用のスーツ姿だ。

インコのセインが、

「大丈夫。確かにこれから行く土地は乾燥しています。しかしタライに水を入れて馬車で行けば問題ないでしょう」

「任されたはいいが、おら、ちっともわからねえ」

「それも大丈夫。南の事情はよくわかっています。これから行くところはミネラル豊かな火山灰の土地なので、オリーブがよく育っています。まずはオリーブ農家に当たりますよう」

「あんたと組んで、おらはラッキーだな。よろしく頼むよ」

「こちらこそ。すべてイシユの配慮でしょう」

「さすがだ」

南下し、イロディア国、ウラジーレ国、イーミロ国を経てエパーニヨ国で素焼の瓦に砂岩色の壁の農家に入り、早速交渉だ。

「いいえ、近くの街に売りに行くより高く買います。地元の貴族にはわたしから交渉しましょう」

税の代わりに農作物を納めることになっている農家に対してはこのような言うのがマニュアルに記載されていた。貴族には損害賠償を渡せよと。

イシュは言った。

「必要があれば大臣や国王にも賠償や献金をしよう」

次第に資産は蓄積され、金庫に大いに金貨が貯まった。大きな倉庫を各地に確保しなければならなくなった。そしてまたそこに信頼できる警護兵を雇わなくてはならない。武器や武装を買わなくてはならない。しかし良質の商品は高価で売れたので、やはり金貨は貯まっていた。

こうして儲けた金でシュールは軍部を著しく膨張させるとともに、社会奉仕のための貧民院をたくさん創った。貧しいこどもや浮浪児のために学校を創った。若者のためにワーキングクラス・アカデミアを創った。

「ワーキングクラス・ヒーローになれ」

そう言った。

そして素質の良い者をシュールに入れた。素質の悪い者には素質が悪いと申し渡し、望むならもう一度努力せよと言った。望まないなら自ら望んで不幸になれと宣言した。そのとおりだ。愚かな者は自ら望んで不幸になるのである。愚かさは勉強ができないとかできるとかではない。頭の良し悪しでもない。無責任な者が愚かだ、自分や他人に対して無責任な者が愚かである。

「皆自由だ。幸せになることも不幸になることも自分の意志だ。望んで不幸になる者を止めることはできない。

誰しも不幸になりたくないことはわかっている。しかし言葉の責任は重い。自ら選んだ以上、神の御名において我々にはそれを阻む権利はない。わたしが言えることはせめて自分には真剣になれ、ということだ。自分だけではなく、人のことも真剣に心配できればそれが最善だが、それができない者も多い。仕方のないことだ。様々な素質や環境によって存在者は操られて生きている。

だがもし他人の心配ができなくても最低限自分のことぐらいは真剣になれ。そう言いたい。それができないのなら……自らの望む状況に陥るしかない」

イシュはある日そう語ったものだ。

角のような鎧が全身に附いた鋼鉄の甲冑を着て、荒々しい髯を膾まで生やした巨漢が突然、事務所の扉を打ち破って開けた。

「イシュというのはどいつだ」

雷のようなどら声で怒鳴る。

召使いの報告を受けてイシュは敢えて自ら階下に降りて来た。

「そう言うあなたはどなたですか」

「ワシはな、リバサウスのガンナサイ男爵じゃ。貴様のような悪辣の奴は成敗してくれるわ」

「ほほう。」

わたしのどこが悪辣でしょうか」

「おまえは金で人の心をたぶらかし、おかしな知恵を附けて社会の仕組みを壊している。おまえは貧乏人を騙し、誘惑し、おまえの奴隷に変えてしまっている。」

おまえは拝金主義者だ。おまえのQ D Qポイントを見せてみる」

イシュは落ち着き払って応える。

「金儲けはしていますが、心を墮落させてはいません。蓄財はしますが、私用はわずかです。パイプとワインとチーズと洋服と書籍や家具ぐらいですかね。王侯貴族のようなことはしていません。」

稼いだお金で貧しい人を援けています。教育を与えています。

あなたたちはどうでしょうか。貧しい者に教育を与えず、奴隷として使用しているだけです。稼いだ金で贅沢をし、大きな館を建て豪華な暮らしをしています。最高の料理を食べ、飾り立てた武具をそろえ、金銀財宝を集めています。家の装飾は金銀象牙に大理石です。あなたは収入のほとんどを私用しています。

悪辣なのはあなたです。どうぞあなたのQ D Qポイントこそ見せていただきましょうか」

ガンナサイ男爵は唸った。

「しゃらくさい」

そして大剣を振りかぶり、イシュめがけて振り下ろす。間一髪で躲した。

「やれやれ、苦節時代に野生の動物に襲われた経験がこんなところで役に立った」

大剣は床に刺さった。これを抜こうとする間にイシュは拳銃を男爵のこめかみに当てる。

「さあ、神妙にしてくださいましょう。暴力は最低です。それでは自由な発言ができなくなる。すると世の中は流れの鈍い川の水のようにたちまち腐臭を発するでしょう。暴力で人を黙らせる者は最低です。そのような者には何の権利も与えるべきではない。生存権もね」

引鉄を引いた。かちりと音がしたが、弾は出なかった。男爵は失禁してしゃがみ込んだ。

警備の者たちが男爵を取り押さえ、捕縛した。シュールの軍部の兵士たちがやって来てガンナサイを連行し、彼の領土まで行った。その数は数百であつた。

砲や銃で武装した兵士はガンナサイ男爵の騎士や武装歩兵を黙らせ、降伏させた。男爵は降伏条約にサインをせざるを得なくされたのである。

こうして武圧しようとする者が時々現われたが、先を見越したシュールは既にどのような男爵も敵わない武力を整備していた。

「常に現状に満足せず、常に批判することは必要なのだ」

イシュはこう言った。

やがて莫大な資金を有するシュールはバーヴァリアン自由領の男爵（バロン）たちから借金の申し込みを受けるようになった。そうこうするうちに担保になっていた土地のいくつかが手に入った。かくしてシュールは領地を手に入れたのである。

事務所を街に残しつつ、農地経営のためにイシュは館を構えるようになった。農奴を解放し、税を減らし、合理的な経営に努めた。館は

じきに数を増やした。この頃、塩の専売は軌道に乗ったので、シベルが農地経営や農民教育に協力するようになっていた。

バロンの支配下では農民は奴隷の身分であつたが、シュールによって解放され、市民と呼ばれるようになり、そのこどもらは学校で尊厳と名誉を教えることとなつたのである。

領地は大いに繁栄し、他領の農民も法度を犯して領地を脱し、シュール領に入るようになった。

これを怒り何人かの男爵が返還を求めたが、イシュは応じなかつた。戦争になったが、名誉を与えられた農民は戦士となり死を怖れず自らの尊厳のために戦つたので、戦争は圧勝した。

やがてバロンたちは農民の移動を抑えられず、ますます衰退した。イシュは零落したバロンを迎え入れて主従関係を結ぶ。領土は拡大し、兵士も増えた。

やがてバロンの大会議が開催され、イシュはバーヴアリアン自由領の代表となつた。その後には統領となるが、その地位をベンダムに譲り、自らは自由革命家と名乗つた。

ベンダムが館の書斎でイシュの耳に囁いた。

「どうやら最近、シルヴィエの眼に付き始めたらしい」

ベンダムはバロンの統領となつて以降、国家戦略や諜報活動に専業するようになり、シルヴィエの動向を把握することを最も重要な義務と考えていた。国家安全こそ統治者の最優先すべき絶対義務である、それが彼の考えだ。

イシュはシベルを呼んで三人で話し合い、こう言つた。

「シルヴィエは超大国として近代的な大量殺戮兵器を持ち、騎馬や弓や刀剣で闘う他国を圧倒している。にもかかわらず、彼らは消耗を最低限に抑えるため、亡ぼそうとする国を自己壊滅に追い込む。情報操作をし、煽動活動を行い、国を内戦状態に追い込むのだ。

どこかにスパイがいるはず。探しだそう。シベル、君に考えはないかい」

シベリアンハムスターは顔を顰めた。

「奴らは手馴れている。実践を積み重ねてノウハウを持っている。巧みだ。かなり難しいな」

ベンダムが強く言う、

「しかし探せばシルヴィエの煽動活動を発見できるはずだ。煽動というものはかなり目立つものだぞ」

イシュは考え考え、

「言論の自由を殺したくないが、文化活動やネットの動きを注視するか」

唾棄するようにシベルが、

「最低だな。国は人のために在り、国のために人がいるのではない。

人権がすべてだ。それを成さない国はシルヴィエと変わらない、悪の帝国だ」

イシュは問う、

「君はなぜシルヴィエが悪と言う。侵略だからか。しかし正確に彼らを知らない。知らずして悪と呼び、攻撃するのは復讐の連鎖の温床となる」

そのときノースが遠征から帰って来た。軍服はサテン地の華麗なものだったが、ところどころ破れ、泥と返り血に汚れている。相変わらず鳥の羽の附いたつば広の派手な帽子。

「街道沿いのオークを駆逐した。道には一里（4 km）ごとに警邏隊を置いた。これで大量の塩の安定した運搬が可能だ。一般商人も安心して行き来できる。旅の安全こそは商業を栄えさせる。どうした、浮かない顔をして」

イシュが事情を説明するとノースは珍しく深刻な顔で、

「シルヴィエについてよく調べよう。君の言うとおりだ。科学的に正確に、客観的に、事実に基づいて知るべきなのだ。そうしなければすべての行動は悪になる。戦場で実際に闘う私にはよくわかる。争いが終わらないのは多くの不幸な誤謬からだ。正確な事実に基づいて行動しないからだ。皆が一斉に正しい科学的認識に基づき、客観的に全体を正確に把握すれば殺し合いは止む。

民族や国や宗教を憎むのは愚かで悪劣だ。それは悪だ。或る特定の民族や或る特定の国の国民全体やイスラム教や基督教やユダヤ教や仏教の信徒全体がまるごと悪であることなどあるはずがない。（カルト的な宗教には例外があるかもしれない）。

そのような認識は科学的ではないし、事実に基づいていない。古代風の稚拙な思想だ。悪を為す者のみを糺すのでなければ、その行為が悪逆だ。民族や国民や宗教の信徒すべてを憎むのは、世界の悪鬼たる者が為す行為だ。そのような者からは生存権も含む一切の権利を剥奪すべきだ」

第四節 ノルテの歴史と神聖シルヴィエ帝国

北大陸最古の国家はグレロ、アルノイ、スポルトの三国であろう。三つの国は大陸の南南西、裂大陸海洋（マル・メディテラーノ）に面した半島にある。

イシュはインターネットを駆使して歴史や国の状況を調べ始めたが、ノースは、

「グレロの都市ペロンにある古文書館に使いを送ろうと思う。既に買附の商社事業は軌道に乗って優秀な人材がたくさんいる。我々が直接業務に携わる必要はかなり少ない。北部ルートのロゴスを呼び寄せて古文書館に調査に行かせてはどうだろうか」

「君の言うとおりだ。素晴らしい考えだと思う。しかしわたしもたまには旅がしたくなった。自ら行こうと思う」

「何だ、それなら私も行きたい」

「俺も」

「オレもだ」

かくしてイシュ、シベル、ノース、ベンダムの主要幹部とも言うべき四匹は出立した。南部ルートの吉郎とロシア嬢の隊に加わったのである。また南西部では海洋貿易の研究をしているジュールが待っているはずであった。

イシュは旅程の道中に非常に満足した。

バーヴアリアン自由領内の街道がよく警護されているのは当然として、イロディア、ウラジーレ、イーミロ、大国ロード、エバーニョ、フロレンセ、アルノイなどの国の街道においてもその国の政府とよく協調し、シュールの通商のために、利便よく警護されていたからである。

シュールの証明書を持った商人は実にスムーズに優遇されて街道を快適に進むことができた。定地点の警護隊は非常に規律よく、堅固に見えた。

初めて行く南方は眼に新しいものであった。

イシュら四名はシュールが専用に使う最快速の駅馬車を乗り継いで昼夜区別なく進む。途中の国々を親しく見る機会はほとんどなかったが、高級な旅籠やレストランで異国の食事や風呂を楽しみ、風情・風俗を車窓より眺め楽しんだ。

道は次第に雪が見えなくなり、山を越えると雨が多かったがじきに乾いた土地に剥き出しの岩がゴロゴロする地域になったり、常緑樹や落葉樹の森やわずかに灌木があるばかりの丘陵地帯に出たりした。空気は次第に暖かくなる。

彼らが乗る馬車は非常の広く、まるで瀟洒な邸宅のように高級で快適であった。個室もシャワーもあり、食事は走りながらも摂れるほど振動がない。

イシュはパイプを燻らし、

「ふうむ。これは素晴らしい。贅沢過ぎるな。ガンナサイ男爵に申し訳ないくらいだ」

これは『蓄財はしているが、私用はわずかです』と言い切ったことを回想し、少々後ろめたく思っただけで述べたのであった。

グレロ王国領内に入ると、石灰岩質の土地ばかりで、逝にし邊の都ペロンには城壁と市門があり、白き石の門は獅子の浮彫を向き合わる紋章を誇らかに聳えさせていた。

青く碧き天穹と、白き石畳の古き街は均整がとれた白大理石の列柱

のならば大きな建築で埋め尽くされ、整然としている。建物の多くは白をベースにしながらも原色で彩色されていた。普遍的な美の彫刻や線画は素晴らしく、壺に描かれた蛸やドルフィンの模様は海洋民族の伝統を連想させる。

ジュールが迎えに来ていた。

「最高の宿をとつてあります。荷物を下ろしてください。部下たちに運ばせますよ」

「ありがとう。しかし一刻も早くわたしたちは」

「わかりました。そう言うと思いましたがよ」

早速、王立古文書館への閲覧申請を出した。

「明日までお待ちください」

しかし翌日行くと、

「まだ手続きが終わっていません。明日もう一度おいでください」

ベンドムやノースは憤慨した。

「昨日は今日来いと言ったぞ」

「わたくしは事務をするではありませんから。わたくしは事務方から言われたとおりにお伝えするだけです」

イシュが二人を制した。

「さあさあ、郷に入れば郷に従えと言うじゃないか。待つしかあるまい」

しかしシベルは思案顔で、

「まさかシルヴィエの手が回って妨害しているのでは」

イシュは笑い、

「考え過ぎだ。」

奴らならもつと有効な手が打てるよ。こんな姑息なこども騙しをするはずがない」

皆頷く。

「言われてみれば確かにそうだ」

まさしくそのとおりで四匹はその翌日に閲覧がかった。手分けして関係書籍や巻物を渉猟し、眼を皿のようにして読み、筆写する。早

朝から夕刻までこれを二日続けた。

三日目に四匹はそれぞれの得た知識を披露し、齟齬がないか、確かめ合った。

それが次に示すメモ、すなわち『ノルテの歴史及び神聖シルヴィエ帝国の概要』である。

『海に裂かれたかのように、四つの大陸に分かれた原大陸（アルケー *αρχή*：コプトエジャ語）は、東大陸エステ *Este*、西大陸オエステ *Oeste*、南大陸スール *Sur*、北大陸ノルテ *Norte* となった。

これゆえ海は裂大陸海洋（マル・メディテラーノ *Mar Mediterraneo*：古エルク語）と呼ばれた。

世界最初の王国はスールの北西部、コプトエジャで生まれた。大海洋を渉るジアツロ諸島を通じて文明はノルテに達した。グレロ、アルノイ、スポルトの三国が王国として栄えた。かくしてノルテにおける文明は南西部沿岸部を中心に広がる。

北東部は最も遅れ、野蛮な土地であった。北極圏に属し、永久凍土とブリザードしかない寒村シルヴィエはトナカイの飼育と白クマ狩りで生計を立てる民であった。

そこに突然、聖者イ牛 *Iye* が現われる。彼自身はその教義や思想を文に残さなかったので、彼が何を説いたのかは明らかではない。シルヴィエ聖教最古の文献とも言える聖典ノルドですらその成立は元も古く（暗誦による口承時代に）遡っても斉歴六六五四である。イ牛の死を六五五〇年とすると、死後百年以上を立てから成ったものでその精度には幾許かの疑義がある。

なお斉歴とは古王国コプトエジャの建国とされる八七八五年前を紀元とした世界共通暦である。

現在残る諸文献から推察するに彼の教義はこのようであった。

「すべてを愛せよ。一切愛はすべてを赦すことによって生ず。すべてを赦す者は無執著である。無執著なる者は龍のごとく一切を肯じ、事実と一致し、神のごとく世界と存在と運命を愛する」

「多く愛する者の心は軽く、正義に充ちている。多く憎む者の心は重

い車輪であり、その魂に罪惡の轍が深く刻まれ、運命を引き裂く。喩え、あなたが正しくとも憎むならば惡であると知れ。自ら望んで地獄へ落ち、祖先家族子孫と人類の運命を亡びへ導く。妄執を捨てよ。一切は空であるという事実を知れ。事実在即した者はただしい。ただしき者はかるくあかるくきよらさやかである」

これらの教義を見る限り、非常にI E的であり、到底現在の帝国シルヴィエとは相容れない。しかし往々にして大宗教というものはこのようなものではないであろうか。それはさておき。

イ牛の教義を聴くために仕事を終えた農民が夜集うことを嫌否した村長むらおきソーンは豪族グランデホーグンに訴えた。

「邪教を教える流れ者がいます」

ホーグンは軍長ナアムに命じ、ナアムは死刑執行人にして死の大鎌(戦鎌ウオーサイス War scythe)の使い手フイーソクを伴って、集会場に赴いた。

聖者は拿捕され、その晩のうちに無残な骸となって返される。すなわち聖者の活動は多く見積もっても一年に満たない。恐らくは数か月であろう。しかしそれは歴史を変えて数千年に渉り人々に影響を与えたのである。

イ牛の教えを受けた農民は迫害されたが、村を抜け、過酷な嚴寒の岩山の洞窟に隠れ、夜陰に紛れて行動し、ホーグンの手の及ばない地域へ遁れ、密かに教えを広めた。イ牛の弟子を称するこの集団の中に、ジインという巨魁荒武者鬚の男が台頭し、教えを聖教と称し、人々はこれをシルヴィエ聖教と呼んだ。ジインは過酷な潜伏生活の中、尋常ではない長寿を全うしたが、一二五歳で老衰死した。一七歳でイ牛の教えに陶醉した少年は百年以上、弟子たちを守ったのである。

ジインの後を継いだシンは直弟子同士で各々が暗誦する師の言葉を確認し合い、教えの決定版を作り、同じものを皆で暗誦し、これをノルドと呼んで伝承することを決した。

ジインとシンは聖教の基礎を創った。この二人は聖教の第二祖及び第三祖であるとともに聖教の守護神と崇められる。

シンの後を金剛が継ぎ、金剛の後を一切智が継ぎ、その後を龍涎が継ぎ、後を禪カフが継いだ。エイチはノルドを初めて岩に刻み、これを版として朱を塗り、熊の革に刷って広めた。第一次聖典ノルドである。これは弟子が既に千人を超えたためであつた。

第九代教主を自称したブソンは初めて教主という言葉を使った。彼は布教を強く進めて表舞台に出たので、たちまち各地の豪族から迫害された。

しかし下級兵士の中に多く信徒がいたため、まず豪族詩靱皮（シジンピ）の下で反乱が熾った。これがシルヴィエ革命の発端である。ブソンは戦いに斃れ死したが、継いだダヴィルは聖戦の名の下に下級兵士を大統合し、死を恐れぬ闘いを展開し、遂に国家を創った。次々聖戦を行い、神聖シルヴィエはイ尹の死から二百年で神聖シルヴィエ帝国となった。

そしてその拡大政策は今も続く。

「聖教を世に広めるため」という大義を掲げ、聖戦を続け、あらゆる手段で多くの国を斃してきたのであつた。広大な領土を国家が開発し、農業や畜産業の収穫率を十倍に上げた。広大な農地や牧地には百億の人間を養う糧が産み出された。金山や銀山、様々な鉱山を発見し、豊かな国家の潤沢な報酬で技術者や科学者を集め、産業を爆発的に発展させた。

科学を遠慮なく発展させ、その都市生活（特に首都非无呂）は高度なものになり得たが、彼らは科学の応用を生活や医療に還元せず、軍備に特化した。

すなわちその圧倒的な強さの理由は、第一に、掟破りの近代兵器使用である。

IEでは非人道的な行為はQ D Qポイントのマイナスになるので、剣による一騎打ちの戦いが基本で、後は弓や投石機などである。旧式銃や大砲は微妙だ。

しかしこういった状況の中で、シルヴィエは機関銃やバズーカ砲、自走式ミサイル砲、戦車、ミサイルや戦闘機まで有している。むしろ

二千二百年をかけて少しずつ整備したのであるが（むろんゲーム上の話ですが）。

どう考えても勝負になるわけがない。

「なぜそれが可能か、なぜ許されるのか？　なぜ神罰も破滅もなく、赦されるのか？」

多くの為政者や学者は考えたが、わからなかった。

「聖者の高貴な教えの遺徳ではないか」

それがいま現在の結論である。それゆえ真似ようとする国家はなかった。いや、いたが、たちまち滅んだ。それがI Eのシステムによる「神罰」なのか、シルヴィエの陰謀なのか、誰にもわからなかった。わからないから「近代兵器」には手を出せない。

もう一つは『屍しかばねの軍団』の存在だ。

彼らは神聖軍の超精鋭部隊で、信仰心により死を怖れず闘うため、その名で呼ばれた。すなわち「我らは殉教者、既に屍である」、それゆえ死を怖れないと言うことだ。

超大国となったシルヴィエは広大な領土と七十六億の人口を有する。それゆえ二億人の正規専門の国家軍隊を持っていた。予備隊を入れれば最大五億と言われ、他国を圧倒している。ノルテの大国と言われるロードさえ全軍二十万なのであるから。『屍の軍団』だけでも軽く百万を超え、たとえ大国ロードとは言え、シルヴィエに対峙すればサムライ蟻と核兵器の戦いに等しい。

一年でけりがついてもおかしくない状況だが、（ゲームの設定上）今日まで二千二百年以上の歳月をかけ、ノルテの大半を制覇したというところである。

最後に非无呂について。城砦都市は正確に四方を東西南北に向け、城壁の一边は百kmの正方形である。壁の高さは百m、その厚さは百m。しかも第一の壁を通っても百m先に高さ二百m・厚さ二百m壁があり、第二の壁を通っても、その百m先に高さ三百m・厚さ三百mの壁がある。

すべての城壁上に迎撃ミサイルが五百mおきに置かれ、常駐軍が三

十万人いる。

都市の中心には聖堂と王宮を兼ねた神聖大真中奥義正殿イヒエロがある。これも東西南北に10kmで、中心にある尖塔は高さ1万mを超え、神の造りたもうたどの山よりも高い。

人口は二千万を超える。

以上、「ノルテの歴史及び神聖シルヴィエ帝国の概要」を終わる』
イシュたちはシュールに帰り、このことを主だった仲間らに説明した。

そして会議を開き、「シルヴィエの動機はかつて正義であつたが、絶対主義となつたいまは間違いだ。批判されない者は腐敗する。自らを批判しない者は悪鬼羅刹だ」と宣言し、自らも国家となつて他国との連盟することが必須だという結論に達した。

第三章 翔陽期

第一節 国家

シュールが国家となる アカデミアでの戴冠式
クラウドとの同盟

イシュはベンドムを統領から国王に格上げしようと計った。

「しかし国になるにはどうしたらいいんだ？」

ベンドムがそう尋ねた。

「統治の正統、法と官僚、税收の構築……かなあ」

「統治の正統って？」

「神か民かそのいずれかによって選ばれ、諸外国にもそれが認められなければならない」

「神はオレを選ばないだろうな」

「では民だな」

「どうやって」

「選挙でもするか」

「国の一切の民が投票者か」

「良心のある一切の納税予定者さ」

「良心のある？」

「そうだ。良心のない者には権利を与えない。罪ある者からはすべての権利を剥奪する。人間だって生存権すら剥奪するではないか。そして税を払うものが選挙権を持つ。むろん課税の免除された者は納税者と同様に扱う」

「ふうん。」

ともかくオレが王になるのはしばらく先のようだな」

「そういうわけにもいかない。バロンを招集して暫定の王に決定しよう」

バロン大会議の中でユージゴー男爵が発言した。

「我らが王に栄光あれ。その正当性をさらに世に知らしめるため、アカデミアにて戴冠式を行ってはいかがか」

「アカデミア？」

ベンダムは呆然とする。イシュはまずいな、と思った。

「いずれにしろ、選挙の後だ」

イシュの書斎に戻ってノースが言う、

「アカデミアはまずかろう」

「アカデミアって何だ？」

ベンダムが問う。

イシュが答えた。

「学校だ。」

正規ユーザーはIEの門を抜けた後、アカデミアで基礎学を学んでからIEで生きるための真の哲学を学ぶんだ。卒業後はQQDQポイントが加算される」

「うわ。じゃあ、オレたちが行ったらもぐりなのがばれちゃうんだ」

「そうさ、私たちは行ってはならない」

だがシベルは、

「しかし、行かなければ怪しまれる。ユージゴー男爵の提案は普通に

考えれば妥当だ。アカデミアの認定は正統中の正統だからだ」

「しかし」

イシュが考え込む。

「不可能な命題だ」

そして数日が経った。南ルートを廻ってさらに西に遠征していたアミス・ポトス・アルスのひよこ三兄弟が帰って来た。彼らもすっかり自信を付けて風格を帯びている。

「実は西に進んでから少し北上しました。クラウド・レオン・ドラゴ国に入ろうと考えたからです。そして入ってから人に聞いて知ったのですが、その王は何と女の子でANKA（アンカ）という名だそうです」

軍事演習を終えてイシュの書斎に寄ったノースは、

「ほう。」

でも、まあ、ゲームだからなあ。そんなユーザーも不思議じゃない。むしろ当たり前かもしれない」

イシュは手を叩いた。

「その話は聞いたことがある。クラウドの名を一躍有名にしたのは、近代兵器で物的に有利なシルヴィエとの激戦に睿智的な力によって勝利したことだ」

「ええ！ 女の子が！」

「それが睿智というもののさ。」

彼らと手を組もう。そのために早く国家としての体裁を整えようじゃないか」

選挙は対抗馬なく、ベンダムを王とするか否かの投票となった。結果は反対票0でベンダム王が誕生した。イシュたちの支配により国は経済的に大いに潤い、人々は豊かになり、紛争・略奪も激減、社会は安定し、商業が栄え、交通は整備され、便利で豊か社会を生み出した現在の体制に反対する者はまったくなかったのである。

選挙結果を各国へ知らせた。知らせを受けた国はすべて祝辞を述べる。いまのところシユールの商活動は各国の利益を損なわないかたち

で行われ、関係国を適度に潤したので、敢えて悪しく言う国はなかったし、悪しく言いそうな野蛮国には承認を求めなかったからだ。

強いて言えば塩の商人たちの一部がシュールに販路を奪われて恨んでいた。だがそのほとんどは賠償金を受けて心を納めていた。薄利多売によつて、賠償金を払ってもシュールは巨額の利益を上げることができていたのでこのようなことが可能だったのである。

シュール建国の祝祭を開催し、盛大なセレモニーに各国の王を招待しよう、イシュが提議し、

「しかしそれは大変な事業だ。

国威を内外に知らしめるために、完全完璧に壮大でなくてはならず、各国の王に失礼のないようにもてなし、すべての安全を保障しなくてはならない。

やはりシベル、これは君でなくてはできない。塩の専売化は軌道に乗った。引き受けてくれるね？」

「わかった。チームを作りたい。人選は俺に一任してくれ」

「むろんだ。もはやどの事業も軌道に乗っている。誰を引き抜いてももはや問題はない」

かつてのバーヴァリアン自由領、現在のシュール王国はノルテ南西部では指折りの金持ち国である。招待された王族は興味津々で出席を申し出た。むろんほとんどは代理だが、通例になく、王本人もしくは王の親族が出席する国がいくつかあった。

シベルは宮殿の建設に着手する。要塞都市ピューリリンの館は王宮に相応しくない。彼らは移転を必要としていた。シベルはイシュと相談し、ある土地に眼を附ける。

「しかし偉大な建築家が必要だ」

建築家はクラウドからミハイルアンジェロという高名な建築家を破格の契約金で雇った。

シベルは言う、

「宮殿を中心とした都市を造ってもらいたい。城壁と街をもデザインして欲しい。そのために開けた山と平野の接した土地を用意した。」

すなわち平野に街を開き、山の絶壁に王城を建てて欲しいのだ。

この難工事と機能的デザインを創れる者はあなたしかない」

豊かな巻き毛と鬚を蓄えた蒼き双眸の彫り深い痩せた若者は頷く。

「わかりました。私の芸術の魂を込めて計画いたします」

その土地は広大な平原と大山脈が唐突に接する場所であった。イグエルトはイ・グイ・エアル・ト（聖なる神の壁の地）であり、平原に突如現われる断崖が城壁のように見えるからである。

王宮というよりは砦的な要素を多く備える城はベンダムの意向であった。

城が建てられたのはフランスのエトルタの石灰岩質の断崖の海岸にある『針の塔』のような、山脈の絶壁からサイの角のように独立した岩だ。螺旋状の路が廻り、豪華な建築が建てられ、大岩自体があたかも彫像に覆われたゴシック建築の尖塔のようになった。城は岩の絶壁の美しいレリーフのように耀く。大航海時代の帆船の舳先の彫刻のようでもあった。

王城には百人以上が乗れる巨大なエレベータをいくつか備える。エレベータは数千本の鎖と巨大な数十の滑車、数百頭の馬によつて動かされた。

謁見の間は背もたれが十数メートルある玉座を奥に据えて、両壁に縞目の色大理石の円柱と、真紅の垂れ幕を奢り、数千人が会せる場所とした。

それを囲うように高い城壁を立て、獅子吼のような城門を備え、石畳の舗装道路を整備し、官庁や議事堂、宗教的なバリシカやパンテオン、民間事業の利用すべき会堂、集合住宅を造り、また寒い地方であるにもかかわらず、古代ローマのような遊技場や公衆浴場を建てた。

シベルはこの都市に繋がる街道を造り、王侯貴族向けの旅籠を整備した。ノースがその警備態勢を整える。また警備隊には壮麗な儀礼装用の軍服を支給した。

街道は各国の壮麗な行列で満ち溢れ、警護はまるで道路の塀のように旅の貴人らを守った。豪華壮大で宮殿のような旅籠は各国の威信を

賭けた奢侈と贅沢の競い合いの場となり、たくさんの金がばら撒かれた。

ロシア嬢とミニーニがデザインした典雅な招待状が各国に届けられる。

「イシュ、大変よ、新鮮なオマールエビが届かないのよ」

「想定範囲内だ。鴨肉は？ それからトリュフを買附に行った隊が帰って来るはずだが。チーズは上物がまだ地下倉庫に大量に残っている。ワインは樽の管理をよろしく頼むよ。貴腐ワインと去勢した鶏もね」

「わかつているわ。オリーブ・オイルの最高級が手に入ったのよ。ああ、軽やかで味わい深いのがね。そうだ、牡蠣の輸入のために最高の早馬を用意して欲しいわ」

ミニーニがそう言う。彼女はいつの間にかあらゆるシチュエーションで調理部門の総監督になっていた。街に季節外れの花々が華々しく飾られる。

祝祭の日は盛大な花火が上がった。

その日、獅子吼門は終日開かれ、行列が次々通過した。争いのないよう旅籠を出る時間を調節し、誰が先か、後だったかを気にすることないようイシュはした。

「貴国にあつては天候も良き午前十時二十分ごろのご出発をお勧めします」

「貴殿の行かれる時間は清澄なる朝まだきの七時こそふさわしく思います」

などと言い、門の前で行列がぶつかって「こちらが先だ」「いいや、我が国こそ貴国に多く金も貸しておろうぞ。こちらを先にすべきが道理」などと醜い争いにならないよう、心を砕いた。

賓客たちは市街の道を花卉の雨で歓迎され、迎賓館に案内される。

三十八カ国が集まった。そのうち三人は王本人であった。ウオリヤーズ同盟、カサック王国、アーマー王国である。いずれも隣接国で、武勇に優れた荒武者の国であった。

迎賓館に豪華絢爛な馬車が集い、貫く行列道路に行く。聳えるイグエルト城へと賓客を運ぶ。客人は誰もが見上げるその偉容に眼を見張った。

「おお、これは」

「遠くから見えた偉観とは、これまた違うものだ、いやはや、何という奇観か」

「白い牙のようだ。剣のようだ」

「神の造った奇蹟か」

城は濠に囲まれ、行列は橋を涉った。石の壁に囲まれた螺旋状の坂を上り、城内に入ると、エントランスは大聖堂のようであった。高い天井と円柱、高窓とステンドグラス、大理石の彫刻群。素晴らしい階段の間。

謁見の間が聖化され建国祝祭の場となっていた。

祝典は厳肅かつ壮麗に行われる。そして祝賀パーティへと移ろうとするとき、隣接の荒武者王たちが王ベンダムを囲んで祝辞を述べた。

ウォリヤーズ同盟の族長ヴァン^{キング}は熊の毛皮のマントをはおり、毛皮の帽子をかぶり、毛皮の靴を履く。縮れた鬚を胸まで広げ、革のベルトは太く胴巻きに等しく、幅広の剣を佩き、太い眉毛、でっけくと太った毛深い巨漢だ。銅鑼声を響かせ、豪快に笑う。

「我々は心より祝福する。我々は強い同盟を求める。シルヴィエを牽制せにやならん。ロードやエパーニヨなど金持ち大国の連合内での発言力強化を止めなやならん。」

我ら戦士の国こそ手を結ぶべきじゃ」

カサック王クロードは黒い長衣に黒く長い鬚で、嶮しい皺を刻む蒼白い無表情な長身の戦士、

「物質主義の氾濫を止めるべき。IEは変質し始めている」

アーマー王ダムドは精悍な四角い顔に短い巻き髪、セイウチのような口髭、ボディビルダーのような体格は王というよりは戦士そのものだった。闘いで強い者を王に決すると言う噂が真実のように思える。

「連合は信用できない。我らは結束すべきだ。だが我らは戦争物資に

乏しい」

つまり彼らはシュールの資金を大いに当てにしていた。戦士の国にはそれが最も不足するからである。それさえあれば強大国にも劣らないはず……それが彼らの思いであった。

シュール王ベンダムは落ち着き払い、微笑みながらも鋭い眼光で三王たちを捉え、

「偉大なる三聖戦士王よ、貴殿らの気持ちは戦士の気持ち、同感いたします。しかし、ささ、いまは晩餐の用意もできておりますゆえ、堅い話は抜きで。どうぞこちらへ会食の間へ」

壮麗なバロック調の広間に王ベンダム自らが案内人となり、侍従らに従えながら三人の王らを促す。

白貂のマントを羽織った王が声を挙げる仰々しい乾杯を終え、極上のシャンパンが飲み乾され、給仕が手際よく配膳し、食事が始めると、イシュは晩餐会の席でゆっくり揺れるキャンドルの光を見つめ、安堵の溜息を洩らした。

ミニーニが雇った料理人の料理がどのようなものか心配だったからである。席次にも苦労した。こういう席は順番を不服として「どうやら席が間違っているようです」「私の席はないようです」などという気難しい要人がいるものだからである。

食事を終えてコニャックが出され、楽隊が静かに演奏を始める。舞踏会となった。

イシュはある少女の前へ行く。それはまだ十四歳の伶俐な少女。

「イース將軍ですね」

彼がそう尋ねると、黒髪を肩の位置で真っ直ぐに切りそろえた背の高い軍服姿の少女は、

「ええ、そうです」

「クラウド・レオン・ドラゴのイース將軍。天才剣豪と世に知られた英雄のイース閣下」

イシュはクラウドの王の代理であるその將軍の名を、念のため繰り返してから、

「わたしはこの国の相談役の一人ですが、イシユマエルと言います。閣下にお話ししたいことがあります」

「何でしょう」

「実は我が国は今日、生まれたばかりですが、既にシルヴィエから厳しい警戒の念を抱かれていますようです」

「ええ。知っています」

「閣下の国はかつてシルヴィエに勝ったことがある」

「真理と正義は、ここでは勝つのです」

「そうでしょうか。他の国は正義であっても破れています。そもそも帝国のように近代殺戮兵器を持つことが何の神罰も受けないこと自体、正義が勝つとは言えないように思えます」

「あなたはご存じないのですか」

「何をでしょうか」

「リアル・ウイルスです」

「リアル・ウイルスとは？ 真実のウイルス？ 現実的ウイルス？」

「これは意外です」

イシユはしばらく躊躇った後に告白を決した。

「閣下にはわたしたちはどのように見えるでしょうか。かなり奇妙な存在に見えているかと思うのですが」

「なぜでしょう。あなた方が皆動物の姿だからですか？ しかしそれは珍しくはない。樹木や妖怪の姿の者もあれば、敢えてコーヒー・カップや破れた帽子になるユーザーもいます」

「そうではありません。わたしたちは金儲けをしています。しかしQDQポイントが奪われることなく、不幸も天罰もなく、繁栄しております。これが赦されるならば誰も同じことをするでしょう。しかし誰も真似しません。QDQを失うことを怖れるからです」

「だから、ぼくたちはシルヴィエと同じように、リアル・ウイルスのせいだと思っていました」

少女は自分を「ぼく」と称するのであった。

「リアル・ウイルス：」

「ほんとうにご存じないか」

「わたしたちは正規ユーザーではありません。不正アクセスで侵入した者なのです」

イースが顔色を変えるかと思いきや彼女は高らかに笑った。

「なるほど、そういうことか。これでいまの疑問が氷解しました。しかしどうしてそんなことが可能なのか想像もつきませんが」

「超越論的な脱自の成果です。解釈学に通暁すればよいのです」

イシュが簡単に説明した。

「なるほど。では、今度はぼくから説明しましょう。」

リアル・ウイルスはその名のとおり現実的ウイルスです。それはこのRPGに仕掛けられたウイルスです。IEは正義が勝つという理想世界ですが、それを現実世界のように、反理想的な醜い世界、力と要領のよさだけの汚い世界に変えてしまうウイルス、それがリアル・ウイルスです。

シルヴィエが存在を許されるのも、ウイルスのせいでIEが機能不全に陥っているせいだと思われます」

「なるほど。それでわたしたちもそれと同じだと思われたわけだ」

「実際、金儲けしても不幸にならないから、ある程度リアル・ウイルスの影響があるのでしょう。不思議なことに影響のある者となない者があるのです。それは個人であつたり、国であつたりするのです」

「しかし閣下が私たちを嫌悪しないのはなぜですか」

「現実の世界でもウイルスにはウイルスの意義があります。生命はウイルスに対抗するために進化して来ました。生物が雌雄に分かれているのは遺伝子を混ぜて様々な型を作るためです。もし皆型が同じだと、その型に合うウイルスが出たとき一斉に全滅します。」

また、生命に寿命がある理由は、一つの型の遺伝子が永く生きると型の合うウイルスに出会う確率が高まるからです。やがて全滅します。だから自然寿命が遺伝子にプログラムされているのです。

IEにおいても、ウイルスが理論的哲学や真理正義を超えた新しいステージへとユーザーを進化させる働きがある。

だから、ぼくたちはあなたのような存在と闘うことはあるかもしれませんが、否定はしません。もっともこの奥義は誰もが知っているわけではなく、恐らくはユリイカの近隣にいた者たちだけでしょ」

「ユリイカ？」

「現在アカデミアの学長をしているユリイカです。彼女はかつてぼくらの旅の仲間でした。あなたとベンダム王やシベルがそうであったようにね。やがて国を建てました。已むに已まれずね。

シルヴィエの操るレオン・ドラゴ王国と争うようになり、いまご覧のように勝利してレオン・ドラゴを吸収しました。

その後です、ユリイカがアカデミアに行ったのは。

彼女はぼくと同じ十四歳の少女で奥義に通曉し、シルヴィエとの戦いにおいて、クラウドを勝利に導いた賢者です」

「それで学長に？」

「そうです。前の学長はウイルスで狂わされていましたので」

「おお、アカデミアまで」

「そうです。I Eの最高学府、真理の総本山、魂とも言うべき至聖の場所までやられていました」

イシュは一気に問題が解決した喜びを感じつつ、

「それを聞いてお願いがあります」

「何でしょうか」

「ユリイカ殿に取り次いでくださいませんか。ベンダム王の戴冠式をアカデミアで行いたいのです」

イースはしばらく考えたが、

「いいでしょう。」

あなた方にはここに存在する必然性があります。あなたにはそうとは思えないかもしれませんが、ぼくにはこれもI Eの意志のような気がします。I Eは生きた人間のように知性を持っているのです。この作者は天才に違いありません。

ユリイカはI Eが進化のために自らウイルスを仕掛けたと考えています。そうでなければどうしてアカデミアまで冒されるだろうか、と

ね。確かにあり得るかもしれない。そう思えばあなたの侵入も何かの必然なのでしょう。

王の戴冠式がアカデミアで行えるよう取り計らいます」

かくして後日、寒さ厳しい北方の山脈の中、屹立する大巖の上に尖った剣のように尖塔を聳えさせるアカデミアで戴冠式が行われた。ベンドムは華美な行列を禁じられ、最小限の随行者を連れ、質素な出で立ちで吹雪の中を赴く。アカデミアは神聖シルヴィエ帝国と国境を接しているが、周辺は神聖不可侵中立地帯とされ、シルヴィエも侵攻不可能な土地であったため、旅は安全であった。

ベンドムはユリイカに謁見して驚く。

ごく普通の、「今日のおやつはアップル・パイにしてちょうだい！」と言う我儘な女の子でしかなかったからだ。

「あら、びっくりしたでしょう？」

お世辞なんか言わなくていいのよ。これが真理なのよ。あなたの顧問・相談役のイシュマエルは面白いキャラね。

また新たな時代が来るんだわ。さあ、始めましょうか」

冷たく冥い聖堂でベンドムは跪き、少女ユリイカの手から冠を頭頂に置かれ、祝福を受ける。

「栄光あれ、睿智、新たなるIEの世界を啓く者に祝福あれ」

戴冠式は全世界にネットで公開された。

弓矢の原始的世界もネットは普通に普及している。数日後、シュールはウオリヤーズ同盟・カサック王国・アーマー王国と連盟し、その盟主となるとともに、クラウド・レオン・ドラゴと同盟を結んだ。調印式はイグエルト城とクラウド城で行われた。

ここに第一次ノルテ国家連盟が発足した。

第二節 連盟

前後するが、調印に先立ち、王名によってシュールの幹部が召集され、イグエルト城の聖大会議堂において最初の王国会議を開き、国家

の組織を左のごとく定め、その上でノルテ国家連盟への参加を承認した。

I 最高顧問

イシュ（マウス）

II バーヴァリアン自由領王

ベンダム（ムササビ）

1 朝廷府

十兵衛（豆柴犬）

2 財務省

ロゴス（うさぎ・ロップイヤー）

3 産業省

アミス・ポトス・アルス（ひよこ）

(1) 通商

セイン（インコ）

① 陸 運

ラシア嬢（ロシアンブルー）

a 塩専売チーム

ハヤテ（十姉妹）、

b チーズ・ワイン・オリーブ

リリ（シマリス）

② 海 運

ジュール（ミニチュアダックスフント）、

ミニーニ（三毛猫）

(2) 農業・工業・資源・第三次産業

マカロニ（モモンガ）、サブ라우（ヤモリ）、

セイン（インコ）

4 外務省

ラマー（サボテン）、

5 国務省（内政全般及び国家警察）

シベル（シベリアンハムスター）、吉郎（イシガメ）、
翔太（イモリ）

6 軍 部

ノース（モルモット・テッセル）、ジョニー（トカゲ）

かくして調印は成立したのであるが、革張りの表紙を附けた調印文書を王専用の重厚な書庫にしまうや否や、連盟の存在は広く知られ、南西部諸国連合から警戒の眼で見られた。

ロウソクのシャンデリア、マントルピースで薪の弾ける音、沙漠の国で織られた絨毯。そこは親しく機密を要する交渉に使う特別な会議室。連合の常任幹事国ロードから王の親書を携えて来た使者に向かい、上等な葉巻を進めながらブランデーのグラスを傾け、イシュは、

「むろん、わたしたちは連合から脱退するわけではない。シルヴィエに対抗するためには、ノルテの諸国すべてが力を合わせなくてはならないからだ。」

しかし現体制に若干の不満があることも事実だ。しかしそれはそれとして」

そう言いつつ、

「港を借りたいという件については是非、話を進めたい。わたしたちは海洋貿易のシステムを構築しつつある。大型帆船を既に数隻、工廠で造船済みだ。」

むろん、輸出入の品々にかかる関税の率はロード王の決めたとおりで構わない」

「御意。」

お話の件は王も既に検討中です。いましばらくお待ちください」

「期待している」

謁見が終わると、イシュは別の会議に赴く。シベルが国家警察の組織を強化したい旨を述べる。

「シルヴィエのスパイがうようよしている昨今、完璧な警戒態勢を構築したい」

「実際、どのようなスパイが捕まった？」

「多いのは芸術家さ。アーティスト、ミュージシャン、作家……まあ、現時点では。」

文芸作品の発表即売やロックの演奏や芝居をするグループだった。

最近、デモも多い」

「自由を束縛するのは嫌だが」

「仕方ないさ。結局、皆のためだ。正義を失わなければ……」

「その正義がいつの時代も問題なのさ。よし。実行しよう。ただし批判機関や監査機関を厳重に設けてくれ。だがなおかつ現場が仕事しにくくならないよう、十分留意してくれ。審議や監査というのはほとんどが現場を非効率的にする。また人員を裂いて負担を生む。資料提出を求めない監査を考えてくれ。」

また人権的見地からの批判で、警察官や一般市民の身の安全が保障できないようなことのないように」

「わかった。」

それから考えていることがあるんだ」

「何かね」

「街道の整備に合わせて旅籠の一部を王侯貴族が使うに相応しい贅沢なホテルにしたい。パリのホテル・リッツのようにね。インペリアルスイート・ルームがあるような超豪華ホテルだ。街道のみならず、同じようにそれを街中にも作りたい。俺はこの数か月で上流階級の嗜好を研究し尽くした。」

彼らが求めるのは桁外れた贅沢や他にない特別なサービスだよ。素晴らしい料理とね。

街中には歴史的な素晴らしいロケーションで、高級ブランド品の店や最高級レストランをセットで作るんだ。あるいはリゾート地の景色が最高の場所に造り、眺めのいい高級レストランやクルーズ・ツアーなどレジャーを用意する。

要するにサービス業を大いに開拓したいんだ」

「なるほどね。」

わたしたちはこれまで商社のようなだった。良い品を探し出し、運んで多くの人に紹介し、提供する。そうやって利益を上げた。そのために街道を整備し、守衛した。最初は私的行為だったが、いまは国家となり、堂々正面から公的にやれるようになった。

新たなステップに向かうのもいいだろう。国家として産業を整備することもわたしたちの主旨には合う。そもそもQ D Qがないわたしたちは清く正しく稼ぐしかないのだ。

しかし民間を阻害してはならない。それでは国は栄えない。人が集わない」

「だが、それは税に頼る国家のパターンだ。

俺たちは自ら稼ぎサービスを提供するモデルだ。または国民を雇用する国家だ。共に働く。喩えで言えば国民を公務員化するに等しい。会社のような国家だ。国民が社員でもあり、利益分配される国家。

だから税は少ししか取らない。取らないわけではないが、何でもかんでも課税ではない。所得税は不平等だ。消費税は俺たちの主旨じゃない。国家のシステムに護られて為された収益活動に受益者負担をもらう。事業税だ。

それに加えて外国の個人及び団体には輸出入事業に関して関税を課税する。

それだけだ」

「君の理念は正しい。シュールにとってはね。シュールにとっては、だ。

理解した。よろしく頼むよ」

「最高の国家を創るよ。理想の国だ。I Eの理想とは別のね」

イシュは次の会議に赴く。

ジュールが船の精巧な模型を設置して待っていた。

「これが最新の船です。二百人を載せて大量の荷物を収納できます。装飾は国威を誇らかに称揚するでしょう。

この見事な帆を見てください。このたくさんの綱を。大砲は五十門備えました。船尾の船長室は王侯貴族が同行しても不足のないように

設えてあります」

イシュは手を振り、

「いや、それより新たな航海経路について聴きたい」

「わかりました。従来は沿岸を廻っていましたが、黄色諸島（アマリリーヤ）を伝って海鳥島（エル・パツハロ・デル・マル）で南大陸（スール）の商人と交易する経路を開発しました。」

珍しい品々はノルテの人々に喜ばれるでしょう」

「わかった。帝国マーロの動きはないのか」

「いいえ。海鳥島は南北の緩衝地点です。南北どちらの国も強い権力を振るうようなことはありません。不文律です。これが利益に適うからです。すべては利益のあるなしに依拠して決めるのです」

「よくやってくれた。大事業だ。君には爵位の授与と叙勲を考えている」

「爵位！ ああ、思っていない幸せです」

「シジュールも国家となったからな。もはや単なる団体ではないのだ。公的な責任は重い。幹部にはそれなりの権限が必要だ。」

考えてもみたまえ、わたしたちの周りにうようよいるあの、客観性の欠片もない知性の低い連中が男爵なんだぞ。君が伯爵になっても、不思議も違和感もない」

「伯爵！」

「まだ正式ではないが、ベンダム王にそう奏上しようと思う。海運に関する大臣級の職も検討している」

「その暁には荒波をものともせず、謹んで、そして身を捨てて公務に取り組みます」

「ジュール、君は期待以上によくやってくれた。困難な仕事だったから少し休暇を取り給え」

「ありがたき幸せです。少し南西部の海岸沿いのリゾートでゆっくり過ごしたいと思っていました」

「子犬の君がそんなことを言うようになったか。いや、そういう意識は重要だ。では、十分楽しみたまえ」

イシュは自分のプライベートな書斎に戻って、ゆっくりパイプを燻らす。

「やれやれ、今日も忙しい一日だった」

そう言つてバーボンを傾けた。暖炉の炎を見ると、心が深く安らぐ。瞑想的な気分になる。しかし閃くものがあつて、彼は俄かにシユールのレターヘッドが入った用箋を取り出し、革の下敷きの上に置いて羽ペンで親書を認め始めた。

宛先はロードの大貴族、フランカ伯爵。

「貴殿に於かれては清く盛んであることと察し、神より伝える言祝ぎの辞を申し上げるとともに万幸を祈念します。またロード王ランデムに於かれましてはその王統の治世が永遠ならんことを。

我らが王ベンダムは世界の平和を愛しております。ついてはスールの大国にお諮り申し上げたいことがあります。

昨今のシルヴィエの征覇侵略の欲は留まるところを知らずあからさまであり、当方の諜報部が入手した情報によれば、北極の海に大海軍工廠を設け、既に五千隻の戦艦を造船し、世界最大の艦隊を以て東西南の大陸への野心を剥き出しにしております。恐らくは貴下の諜報機関においても同様の情報をお手にしておられる事でしょう。

さて。

これは実に世界の危機でございます。力には力を。世界は微妙複雑なパワーバランスで成り立っております。我らはスールの霸王マーロの皇帝羅汜(ラハン)と手を結ぶ必要ありと貴殿はお感じになられませんか……」

呼び鈴を鳴らす。

「何でございましょうか」

直属の執事が現われる。

「外務省のラマーを呼んでくれ」

サボテンのラマーは歩いてやって来た。

「お呼びですか」

「いま我が国にロード王の親書を持って来た使者が滞在している。彼

は明日、帰国するが、誰か使者を立てて、ロードの使者とともにロードへ赴かせ、わたしが書いた親書をロードの外交顧問に渡してもらいたい」

「外交顧問とはフランカ伯爵ですか」

「そうだ。適任者を選んで重要機密でお願いしたい」

「かしこまりました」

ラマーが去った後、イシュはシベルを呼んだ。

「さっそく君の警察機構を働かせてもらおうか」

その頃、ジュールは自分の屋敷で従者に荷造りを差せていた。家令を呼び、

「しばらく旅に出るから。明日の早朝に出発する。今夜は少し、盛り場に出て食事でもしてみようかな。ああ、むろん、遅くはならない。

さあ、先日仕立てた注文服を出してくれ」

ジュールは盛り場へ出た。華やかなランプやロウソクで巧みに作られたイリュミナシオン。楽隊の演奏。貴族風であり抑制され洗練されたフォーマルな黒い衣服はけばけばしく鮮やぐ艶めかしい夜の巷では反ってきらびやかであった。

兼ねてより入りたいと思っていたバーに入る。木目の美しいカウンタ―に坐ると、蝶ネクタイのマスターが、

「ご注文は」

ジュールはスク립ト体の文字で流麗に書かれたクラシカルなメニューをじっくり眺め、慎重に、

「ギュスターブ牛のホット・ミルクで」

「かしこまりました」

マスターが下がる。

隣に人が坐った。女性だった。ジュールは少しドキドキした。自分はこの場に相応しいかっこよさでミルクを飲むことができるだろうか。

金の飾りのある蓋の附いた陶のジョッキでミルクが来る。器を傾けて少し文様を鑑賞してから親指で蓋を開け、香りを嗅いでから静かに

啜る。完璧だ。自分でそう思う。

「うまいな」

そう呟いても見る。隣の女性の反応を横目で見る勇氣はなかった。もう帰りたくなっている。

「マティーニのお代わりを」

その女性が言う。

『ぼくはお酒が飲めない……』

パケットから革装丁の小さな本を出し、羊皮紙の頁をめくる。箴言集だが、言うべき気のきいたセリフはなかった。だがこんな本が女性に好まれるだろうか。もし訊かれたら図書館で『アフリカの日々』を借りようと思ったら間違えられてしまったと言おう。訊かれるはずもないが……

マッチを擦る音。シガリロの匂い。ジュールは無意識にそちらを向いてしまった。彼女と目が合う。若い女だ。少女のようにも見えた。につこり微笑んですぐぷいっとあちらを向く。ジュールは席を立った。

少し夜の街を歩いたが、屋敷に戻り、

「眠る。ベッドの支度をしておいてくれ。それから枕元に水を」

「ミルクでなくてよろしいのですか」

彼はそれに答えなかった。

用意されたシルクのパジャマを着て羽根布団に入り、天蓋から垂らされたベルベットのベールを閉じさせる。

眠った。夢。生まれたばかりの頃、何匹かの兄弟と、眼も開かぬのに夢中で母の乳を争ったこと……御主人の部屋で走り回って、ベッドの脚に頭をぶつけてころころ転がってけらけら笑ったこと……などなど。

素晴らしい朝で、輝かしい馬車がジュールを待っていた。彼は革張りにソファと繻子のクッションにゆったり坐り、刺繍のカーテンを閉じた。

護衛の騎兵隊五十騎が前後左右を警護する。また馬車の後ろに荷物用の馬車や調理人や家令などの馬車が続く。大名行列というわけだ。

その頃、イシュの親書は外務省を出発した。外務省の建物はイグエルトの城を囲むいくつかの建物内の一つで、華やかなロココ調の邸宅風の建築である。出発すると迎賓館に赴き、そこでロード王の使者と合流した。

「出たぞ」

「わかってる」

「追尾者はないな」

「ここではな」

「外務省に侵入する者が出る可能性も想定していたが、さすがにそれはなかったな」

「当然だ。この旅の途中が最も危険だろう」

サンガラスに黒いソフト帽、黒いコートにスーツ、靴、ネクタイと黒尽くめの二人の男が距離をおいて外務省の馬車の後を追う。

街道に入ると幾千もの馬車や馬が往き来する。除雪された石畳の道は幅が三十mで、可能な限り真っ直ぐ続き、ところどころに警備隊の駐在する砦がある。

その日の夕、シベルの建設した高級ホテルが既に建っていて、ロード王の使者はそこに泊まる。ジュールもまたそこに泊まっていた。

ジュールはレストランの個室で贅沢な晚餐を終え、デザートのチーズを齧りながら食後のホット・ミルクを啜っているところだった。

「退屈だな」

無意識につぶやく。

「お呼びですか」

個室の外の控えの間にいた家令が覗きに来た。

「いやいや、独り言だよ。そんなに大きな声だったかな」

「聞こえました。劇場でショーがありますので、ご覧になってはいかがですか」

「演目は何かな」

「今晚はフラメンコです。ジプシー出身でいま話題の歌い手と素晴らしい踊り手とギター奏者です」

「見てみようかな。席をリザーブしておいてくれ」

劇場は暗くなり、ギターが奏でられ、どことなく懐かしい、原的な郷愁に触れる切ないメロディが始まる。しわがれた声を振り絞る深い歌とともに激しく足を踏み鳴らし、カスタネットを打つ長い波打つ黒髪の手。

どこからともなく葉巻の強い匂いがする……嗅覚の鋭い彼は苦手だったが、イシュのせいでだいぶ慣れてはいた。

シャンパンの注がれる音とともに、ジュールの耳に誰かの会話が聞こえる。子犬とは言え、犬なのだ。耳は鋭い。

「来たぞ。よし、行動だ」

「あ、奴ら動いた。よし、追うんだ」

ジュールは訝しく思った。腰の剣を確かめると席を立つ。

「あ、ジュール様、どちらへ」

家令が言っても、

「警護の者に来るように言ってくれ。ぼくもどこへ行くかわからない。ともかくここを出る」

出てすぐにわかった。黒尽くめの二人が階段を上がる。ふつと脇を見ると手動式蛇腹のエレベーターが上がっている。

「あれを追っているのかな」

ジュールは階段を上がった。駆けながらスマートフォンを出し、小さい声で、

「ぼくだ。」

そっちじやない。北の階段を上がっている」

SPにそう連絡する。

足音は五階で階段から廊下に移ったようだった。ジュールも五階に着く。角を曲がって、

「あ」

誰かとぶつかった。彼女は倒れた。

「ああ、すみません」

起こすと、



「あなたは」

昨晚バーで見た女だった。「これは、どうも……」

そのとき凄まじい絶叫が響く。

「何事だ」

ジュールが行こうとすると女が、

「行かないで！ 怖いわ、ここにいて！」

「しかし」

自分は国家の責任ある立場の者である。行かなければならない。ジュールはそう思った。スマホを取り、

「廊下に女性がいるから保護してくれ。ぼくのはいい。叫びが聞こえたんだ。緊急事態だ！」

短く叫ぶようそう言ってから、「ごめんなさい、ぼくは行かなければならない」

その部屋はすぐわかった。扉が開いていたからだ。前に立つと部屋は暗く、風が吹いている。ジュールは恐怖を感じた。死の臭いを。いや、実際、血の匂いがしていた。

慎重に部屋に入ると、

「動くな」

冷たい声が響く。相手が銃を構えているのが闇を通して感じられた。嗅覚は映像をも結ぶのだ。

「動くなよ」

油の臭いとともに、照明が点く。銃を構えている男がランプに点火したのだ。黒尽くめの男だった。部屋の窓は大きく両開きにされ、カーテンが躍り、冷たい雪風が吹き込んでいる。もう一人の黒尽くめの男が血を流して倒れていた。

「おお、何と。あなたは」

「君は、いったい」

「ジュール閣下」

「いかにも。君は」

「私は国家警察特殊任務隊のBです」

「おお、シベルが新しく作った……」

「そうです。特別任務で最高顧問殿の親書を奪う者がいないか警戒していましたが」

事情を説明する。

「この部屋がシジュールの特使の泊まる部屋か。いささか無防備では」

「王の親書ではないから特別の場所を占められなかった、と推察しますが。しかし、確かに部屋の選択は仕方ないとしても、守衛ぐらいいてしかるべきだったとは思います。」

どうしてこうなのかわたしも理由は知りません。ただ任務を果たすだけです」

「文書は盗まれたのか」

「わかりません。まだ確認できていません。どこにどうしまつてあるか知らないのです」

「外務省の使者をすぐにここに呼んでくるんだ。確認させよう」

「わかりました」

「ちなみにロード王の使者の部屋は？」

「この隣ですが、いまは同じく食事中です」

そのときジュールの巨漢SP、ゴジアトが入って来る。骸を見て、

「おお、これは。閣下、ご無事ですか！」

「無事だよ。さあ、殺人者を追おう。窓から逃げたのだね、B」

「そうです。漆黒の部屋でAを斃して逃げました」

窓から覗く。五階だが、階ごとに庇のような張り出しがいくつかあり、身軽なものなら逃走経路にできなくはない。

「君らは侵入する犯人の姿を見たのか。見てないのだとしたら、どうしてこの部屋に入ったんだ」

「私たちは使者の周囲に怪しげな男がいることに気が附きました。昔風の野蛮な貴族で巨軀でした。彼は突然ショーの途中で席を立ちました。」

これは予想できることでした。なぜなら私たちは外務省の使者が親書を保管する部屋に警備を付けていないことに気が附いたからです。

狙われて当然でした。

荒鬚を蓄えた武猛貴族を追って私たちは階段を上りました。彼はエレベータを使いましたが、間違いなく五階に行くと思いましたが、行かないなら追う必要もないからです」

「なるほど」

「彼の姿は見えませんでした。私たちは使者の部屋でかすかな物音がすることに気が附きました」

「で、合鍵で入った、と。いや、言いわけしなくていいよ。君らの職務上、そのぐらいのことはするだろうさ。」

それで闇でAは襲われ、君は助かった。相手は一人だった？」

「明瞭ではありませんが、単独であつたかと」

「ふうむ、不自然だな。だが、いまは考えているときではない。行動しよう。」

ゴジアト、シリーに連絡して外を廻らせろ。それから街道警備隊に知らせて調査に当たらせるんだ。シベルにも連絡しよう。さあ、ぼくらもすぐ捜査にかかろう。

Bよ、外務省の使者を呼ぶんだ」

文書は盗まれていなかったが、封が開けられていた。写真を撮られた可能性がある。恐らく誰も来ないと思っていたのだろう。予想外にAとBが入って来たので、封緘の復元隠蔽工作を施す間がなく封が破れたままにして逃げたに相違ない。

捜索しても翌朝までかかっても何も見出せなかった。

シベルから報告を受けたイシュは説明を遮り、

「で、君はどう思うかね。むろん、犯人のことだが」

気怠そうにシベルが言う。

「話の腰を折らないでくれ。憶測ではなく事実を言おう。」

Bはアーマー王国の出身者で、ジュールがバーであつた女はカサク王国の民で、窓からではなく、廊下を堂々と南階段から降りた殺戮者はウォリヤーズ同盟国のザキ男爵だった。

彼らは白い眩さを持つ金貨を持っていた」

「シルヴィエのウツシミイ金貨か！」

「これほど簡単なことはない。俺たちは三武王を告発するのさ」

第三節 連邦

当然のことながら三人の王はしらを切ったが、シュールが経済援助を断って宣戦を布告すると、それぞれの国の武人や将軍が内紛・叛乱を起こし、事件からわずか一週間後には血の滴る王の首がベンダム王の前に差し出された。

イシュはネットで勝利宣言をする。

「裏切りの王朝を断絶し、邪な血統を排す。王が天からの命令に拠るものとすれば、いま天の命令は革まった。

これを革命と言う。

随って、ウオリヤーズ同盟国の王をノースとする。カサツク国の王をシベルとする。アーマー国の王をマカロニとする。

シュール（旧バーヴアリアン自由領）を含め、四か国を以て一つの集合体とし、よって連盟は解散し、連邦とし、今後はシュール連邦と称する」

アカデミアは直ちにこれを承認した。クラウド（・レオン・ドラゴ）も同様だ。すべてネット上で即座に行われたので、各国がこれに追随するまで四日ほどだった。

イシュは連邦会議の議長となり、議員の招集権と議会の開催権とを掌握した。ここまであのホテルの事件からわずか十一日で行われたのである。

最初の連邦会議はイグエルト城で行われた。美麗に荘厳された王が集い、さまざまな法が決議された。

王ベンダムは毛皮のマントで筋骨隆々の全身を覆い、金銀の宝飾の鏤められた大剣を佩いて威風堂々。巨漢の護衛やサーベルを佩いた黒服の侍従、獣の革をまとう大臣や副官らを率いてバーヴアリアン自由領に相応しい猛々しさ。

ウオリヤーズ同盟国王ノースは濃く鮮やかな青のサテンにレース付きカフス、房飾りやフリルや刺繍に飾られ、黄金とルビーとサファイヤとエメラルドとダイタモンドの嵌められた柄の剣を持ち、相変わらず派手な羽根飾りの帽子は珊瑚や真珠や貴石の満載。

カサック国王シベルは黒尽くめ。黒のサテンに黒のベルベット、黒の貂に黒の豹皮、貴石宝石金銀一切なし、革の鞆に宝飾も螺鈿もない剣、警護の荒武者二人を従えるのみ。

アーマー国王マカロニは長髪を靡かせ、痩せた精悍な体に純白のシルクと紫のベルベットと獅子と虎の下皮をまとい、奇抜なマントやベルトやチョッキを組み合わせ、浮き彫りのある革の鎧を着て幅広の大剣を佩く。

壮観なる哉、豪奢逸楽なる王者の集会。

壮麗な美々しい会場は華で飾られ、椅子はギャザーのたつぷりと入った、豊かな、柔らかい革張りや煌めくように鮮やかな繻子で絢爛たる刺繍が入れられていた。

「我々は鉄の団結を誓う。生きるにはこれしかない。生きるとは神の与えたもうた命題だ」

バーヴアリアン自由領王ベンダムがそう主張し、喝采を浴びた。彼は鬚を蓄え、すっかり国王らしくなった。会議は長く、何日も続いた。休憩時間を多くとり、昼食は三時間以上かけた。夜は晩餐会を催し、大いに杯を傾けた。皆仲間なので、遠慮などない。会議は楽しくさえあった。

イシュは言った。

「我々はウイルス学を学ぶ必要がある。ウイルスを悪であるとは言いきれない。我々を一定の真理へと導く。ただしそれは言説が及ばない区域にある。」

我々は現実においてこれを手にし、味わい、使う。それしかない」
『ウイルス学大綱』はこうして研究組織を作ることから始まる。会議は終了し、それぞれの国に帰った。

かくして数日が過ぎるが……………

ある日、白亜の連邦事務局に、壮麗に飾った使者がやって来て恭しく礼をした。

「今年は我が栄光のロード王国が幹事国です」

使者が持参した麗々しい文書はノルテ南西部国家連合会議の開催通知だった。

イシュは壮麗な行列を従えて国を出発した。

南下する道中は春という季節もあり、素晴らしいものだった。

連合国会議に参加した。開催はロードで行われた。大航海による貿易で繁栄する大国。もつとも南にある国の一つでシルヴィエの脅威から遠いことが開催地となった理由だ。イシュは演説し、連合が各国の思惑で機能不全に陥っていることを訴え、現にある国が事実上シルヴィエに魂を売っていることを指摘した。イシュの意見は入れられず、その晩、イシュは脱退を決意する。

脱退表明の演説の後、クラウドのANKAもこれに同調する。永劫不可侵条約を結ぶ。数か月後には新連盟が誕生し、南西部の各国が加盟した。こうしてロードを中心とする南東連合と南西連盟の対立が生じるが、シルヴィエはこの好機を逃さない。

そのときウォリヤーズ同盟国で叛乱が熾り、これを討伐するとき、イシュはシュールの帝国構想を発表する。

第二部

第一章 曇天暗雲 桜華の春爛漫

第一節 シュール帝国

皇帝イシュの即位。真理は生きていて言説に非ずと悟った彼は自らを生きている真理とし、莊嚴する。その一環として、首都イグエルトを大幅に拡張し、戴冠式にはユリイカを招く。交渉と征服の日々。南

西部の国々を統合し、大帝国の道を。軍備拡張のさなか、シルヴィエより招待状が来る。ジェット機での旅行。絶対皇帝イヴォンゾ・グルグレリオウド三世。シルヴィエ帝国の儀式。大聖儀会。聖イキの生誕日。大真理を祝し、供養する。

第二節 スール

航海。古王国コプトエジャを通じて帝国マーロの膂力皇帝羅汎との面会を求める。マーロとの秘密同盟に至る。最古王国コプトエジャで世界の秘密を見る。マーロの軍事的協力を背景にイシュはノルテの南西部を統合し、大帝国を建てる。アカデミアとクラウドの独立は守る。永劫不可侵条約のため。

第三節 大陸軍、大海軍

シルヴィエは大量生産する近代的な品々を生産するも、国交がなく、経済的には頭打ち状態。シュールは世界貿易で莫大な利益を上げ、世界最大の経済大国になる。これを軍備に投ずる。世界最大の海軍工廠を建造し、大戦艦シユーニヤの完成。新無敵艦隊の編成を行う。貿易船が謎の海賊に襲われる。警戒を厳重にするさなか、シルヴィエ海軍との衝突。又同時に巡洋艦が海上で空爆を受ける。講和条約。破綻。

第二章 正午…大帝国戦争 夏至 しかし雨

第一節 ビッグバン、そして敗戦

世界大戦の序章

遂にシュール帝国と神聖シルヴィエ帝国の戦争が勃発する。大海戦。嵐の夜の海戦、籠城と空襲、平原の戦い、山上の極寒の戦い。市街戦。

第二節 シルヴィエ侵略及びゲリラ戦

首都へ向けたシルヴィエ陸軍が南下し、各国が陥落する。シュールの首都が炎上、陥落する。蹂躪、屈服、屈辱。イシュらは地下に潜伏する。アカデミアの号令。シルヴィエの謂う、聖界の俗世への不可侵

論。革命の英雄が地下世界を群雄割拠する。正義の革命。革命分子の統合。イシュの演説。シルヴィエ現地軍（外人部隊）の寝返り。大武器保管庫の奪取。各地で革命の烽火が。再軍備。再び開戦。

第三節 決戦の日

ラスト・スタンド

シルヴィエの惨敗。

第三部

第一章 午後…永遠平和 もしくは盛夏

第一節 和平交渉

停戦条約調印式と各国の思惑。戦後処理。復興。

第二節 永遠平和のために

イシュが永遠平和の構想を練る。帝位の禅譲。アカデミアに永遠平和講座を設ける。

第三節 最後の答

しかし修行者イシュは鬱悶々として過ごした。シルヴィエの逆襲。シール帝国の崩壊。流浪の民。

第二章 黄昏…燦金の氾濫 もしくは秋

第一節 西大陸

鷲・獅子の国への旅。沙漠大陸。アンシャル帝国の見聞録。弓矢と斧の国アパンチャ。

第二節 東大陸

龍の国への旅を夢想する。大国シン、強国クヌを廻る。解脱とは何か。帝国再び。

第三節 ○○

静寂。初めの終わり……………

ル俺
ス私
ジュールぼく
スぼく
おいどん
それがし
たい
をかけた学者。懐中時計）僕

最高顧問

イシユ（マウス）

バーヴァリアン自由領王

ベンダム（ムササビ）

1 朝廷府

十兵衛（豆柴犬）

2 財務省

ロゴス（うさぎ・ロップイヤー）

3 産業省

アミス・ポトス・アルス（ひよこ）

(1) 通商

セイン（インコ）

① 陸 運

ラシア嬢（ロシアンブルー）

a 塩専売チーム

ハヤテ（十姉妹）、

b チーズ・ワイン・オリーブ

リリ（シマリス）

② 海 運

ジュール（ミニチュアダックスフント）、

ミニーニ（三毛猫）

(2) 農業・工業・資源・第三次産業

マカロニ（モモンガ）、サブラウ（ヤモリ）、セイン（インコ）

4 外務省

ラマー（サボテン）、

5 国務省（内政全般及び国家警察）

シベル（シベリアンハムスター）、吉郎（イシガメ）、

翔太（イモリ）

6 軍 部

ノース（モルモット・テッセル）、ジョニー（トカゲ）

二班	十兵衛（豆柴犬）、ハヤテ（十姉妹）
三班	マカロニ（モモンガ）、ロゴス（うさぎ・ロップイヤー）
南部ルート	【チーズ、ワイン、生ハム、塩漬肉・魚、オリーブ】
一班	翔太（イモリ）、セイン（インコ）
二班	サブラウ（ヤモリ）、アミス・ポトス・アルス（ひよこ）
三班	吉郎（イシガメ）、ラシア嬢（ロシアンブルー）
軍部	ノース（モルモット・テッセル）、ジョニー（トカゲ）、
塩専売開発チーム	シベル（シベリアンハムスター）、リリ（シマリス）
海洋貿易研究チーム	ジュール（ミニチュアダックスフント）、ラマー（サボテン）、
セイン（インコ）	